

# 教職大学院

# Newsletter No. 55

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.07.29

## 教師教育のオルタナティブズを求めて

国立教育政策研究所初等中等教育研究部 白水 始

6月29, 30日に福井大学教職大学院のラウンドテーブルに参加し、教師教育の一つのプログラムが生まれつつあると感じた。プログラムであるとするならば、その一つひとつの要素について、「なぜその要素が必要なのか」、「その順序でなければいけないのか」などを問うことができる。それによって、プログラムを支える考え方一言わば、教員養成を支える理念や学習理論を互いにもっと明示化し、共有し、深化することができる。わが国の教員養成もより実りのあるものになるだろう。今回、その第一歩となる貴重な経験をさせていただいたように思う。松木先生を始め、みなさまに感謝したい。

我々が学ぶさまざまな機会のうち、学校など「公式な場所」で学ぶ時間は、人生全体で見ると、10%にも満たないという試算がある (<http://life-slc.org/>)。後は、家庭や職場、地域で学ぶ訳である。教員人生に照らすと、学卒後に教職大学院で修士を過ごし、その後官製研修に全部参加したとして、フォーマル・ラーニングの機会は15%程度しかない。そこで「残り85%に繋がる杭をどう打ち込むか」という極めてシビアな問いを教員養成・研修機関は問われていると言える。学び手から見ると、「何を学得現場に出るか/帰るか」という切実な問いである。

時間は限られている。「教職に必要そうな知識」を満遍なくレクチャしても何も残らない。これは、初日にお話を伺った教師塾や、和歌山大学、福井大学のいずれにも共通する考え方だった。学校に実習を一任する「丸投げ的なOJT」でも、限られた時間を浪費するだけである。その点で、いずれの機関も、学校現場における具体的な経験と、学習に関する抽象的な理論とをいかにミックスして提供するか、両者のバランスをどう取るかに腐心されていた。

ここから二つの道が広がっている。理論によって学び手の物の見方をガイドし(端的に言えば「絞り」)、できればそれに基づく授業の型(How-to)も提供してから、実践的な経験に向かわせるやり方と、先に自由な経験を積ませて、本人に疑問や気づきが生まれたところで、理論に触れさせるやり方である。私は、学習科学という介入性・デザイン性の強い分野を専門にしており、前者に慣れ親しんできたため、福井大学の取り組みには驚いた。修士1年生で週3日間の現場経験を積み、そこで掘んだ課題をもとに、理論にも触れなが

ら2年間掛けて修士論文(実践報告書)を書き上げていくモデルである。そのお話を伺った最初の直感は、「授業参観、実践、学級経営、特別活動、部活動、職員会議、研修会を全部学ぶというのは、相当盛りだくさんだな」というものと、「本当に修士生がその活動の中から自分の問いを見つけられるのだろうか」というものだった。これに対して、例えば、学習理論に基づく授業の型を現場で試すやり方では、「授業実践」だけを対象として、「その授業の型で本当に子どもたちは学ぶのか」という問いを検証することになる。この立場から見ると、「福井大学の院生は、いったいどういうつもりで現場に行き、何を学んでくるのだろうか?」と不安になるのである。自分が教員になったつもりで、戻ってきた院生の言葉をどう聞き取り、何を返せるのかが不安になっていたのかもしれない。

実際、二日目のラウンドテーブルのグループに同席した修士の2年生は、インターンシップが半年ほど経過した10月頃、その意味や意義がわからず、「暗黒時代」を過ごしていたと言う。ちょうど福井大学の教育学部からインターン先の教室に教育実習生が来ていた頃で、素直な小学生から、「お兄ちゃんは実習の先生と何が違うの?」と聞かれて、満足に答えられなかったとも言う。それが大学院教員や現場教員の一言で、「子どもと共に学ぶ存在としての先生」という目標を見出し、「教員になってから伸ばしてゆく芽を育てるもの」としてインターンシップを意味づけ直していた。なお、よくできたことに、このラウンドテーブルが全修士生必修の学びの場にもなっており、上記の修士生は同じテーブルの参加者から「後でジャンプするためのしゃがみ込みだったんですね」というイメージ豊かな言語化を得ていた(私自身も「自分の学びの

### 内容

- 巻頭言：教師教育のオルタナティブズを求めて (1)
- ラウンドテーブル特集 (2)
- 院生紹介 (17)
- 敦賀友たち作りワイワイ講座に参加して (23)
- 学生募集の案内 (24)
- スタッフ紹介 (24)

価値は後で決まる」と思えるか否かというアセスメント手法の着想を得た)。

以上をまとめると、

- 1) 理論の明示的なガイドなしに、学校を「丸ごと」経験することによって、当然悩みや苦しみや試行錯誤を体験し、
- 2) それを大学院に戻って仲間と話し合い、現場教員と往復書簡を行い、理論書を読み込むなど、抽象度の異なる多様な言語表現に触れながら、
- 3) 長期間の軌跡を報告書に凝縮することで、自分だけのストーリー、言わば、自分なりの学びの理論(モデル)を構成する

といったプロセスが狙われていると考えられる。

このまとめは、あくまで一例にしか依拠していないが、私にとって大事なものは、このようにまとめることで、さらにその根底に次のような理念が横たわっていることが明らかになる点である。すなわち、「理論を与えないことや問いを押しつけないことが本人なりの問いを生むことに繋がり易い」、「待つて待つて生まれてきた本人の気付きや問いが貴重である」、「それが本人固有のものであればあるほど、自分の理論を創り易くなる」などである。逆に、学習科学的なアクション・リサーチの根底には、「明確な理論や問いの提供が逆に本人なりのその先の問いを生み易い」、「したがって、本人なりの気付きや問いの生成を無理に待つ必要はない」、「共通の問いを与えても、個人が創る理論は独自である」などの前提が横たわっている。これらの理念、あるいは主張は、一件成立したらよいのではない。実効的なプログラムをデザインするには、その生起確率が重要である。いま、私たち

は、学部生・院生・教師一人ひとりの成長をケースと見立て、その多様なケースを束ねて何がどの程度当たるのかを検証するフェーズへと進みつつあるのではないか。そのためには、福井大学のあのコラボレーションホールの棚一面に飾られていた修士生の実践報告書が貴重なデータ——一人ひとりの体験の主観的な言語化であり理論——となる。もし、それに伴う2年間の全活動記録や授業風景がライフログなどで残すことができれば、どのタイミングで何が言語化され何が意識され何が捨象されるかを照合することができる。そこまで来て初めて、私たちは、どのような理念や理論が虚構であり、何が少しは妥当かを知ることができる。

教師教育は、わからないことばかりである。「教師という職業は複雑で多面的なものだから、それを丸ごと体験することでしか学べない」という言説と、「教師という職業は複雑で多面的なものだから、まずは絞って学べるところから学んでゆくしかない」という言説とがどちらも正しく感じられるぐらい、判断根拠が育っていない。それを豊かにするには、それぞれのプログラムが相互作用を通して、その拠って立つ理念を明言し、吟味し、検証していく地道な作業が必要である。その先に、もしかすると、私たちは2年間でそもそも教えきれないことを教育しようとしていたことや、もっと長い時間をかけた理論と実践の往還の在り方を知ることができるかもしれない。その日まで、一見標準的とは思えない教師教育の在り方も含め、たくさんオルタナティブズを提案し、その中から賭けるに値するものを選んでいくしかないのではないか。

専門職として学び合うコミュニティを培う／実践研究福井ラウンドテーブル2013



## ラウンドテーブル特集

### zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

#### ／協働を創りだす

zone Aでは、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」に「協働を創りだす」というサブテーマを加え、改めて学校組織改革について考えていくことにしました。

まずsession I ポスターセッションでは、雲浜小から子ども中心の授業を目指した「雲浜式ワークショップ」と呼ばれる授業研究会について、今年移転開校となった中藤小からは「異学年合同学習」等について、校内での協働体制を創りだした具体的事例報告をいただきました。また、月見分校からは全教職員で行った授業研究会の様子を、福井県里親会には、親、教員、保育士等の関わり方を示す「コモンセンスペアレンティング」プログラムを紹介していただき、支援を必

要とする子供たちに対しては、よりいっそう手厚く分厚い協働体制が必要であることが見えてきました。安居中と赤塚第二中(東京)からは安居の修学旅行を利用して行った交流会の様子が互いに紹介され、学校外で協働することで、子供たちのコミュニティが広がっていった具体的事例として提案いただきました。

session II シンポジウムではまず県生涯学習文化財課道関先生から、勝山北部中でのNIEやESDを通じた教師、生徒、地域の協働組織づくりのお話をいただきました。気仙沼市教委の及川先生にはユネスコスクールである気仙沼市小中学校の外とのコラボによるESD推進の様子、そして、震災の際にはそれが子供たちの学びとしてどう機能したのか語っていただきました。

「協働」を創り出す鍵として新聞等を利用した「発信」、それによって地域や社会から評価されやがてその輪が広がり、ひいては子供たちの自信や達成感につながっていくこと、そのためにはその子供たちによる活動が、地域や社会を変えうるものとならねばならないこと（「今が勝つ山」ステッカー、九頭竜川ゴミなし運動、震災復興活動等）が見えてきた反面、それを仕掛けるためにはやはり最初の協働参加者が必要で、意を同じくするコーディネータの存在も大きいことがつかめてきました。そして「やらされ感」は協働の天敵！協働を楽しむことの重要性を改めて感じました。

sessionⅢフォーラムは3つの会場にわかれて行われました。第1会場では、光陽中からは、小中協働の体制作りを行い、小中の一貫した指導の流れによって、子供たちに自己有用感を育ててきたこと、赤塚二中では協働した授業改革を通して子供たちに確かな学びを保障してきたことが報告され、両校ともいわゆる「生徒指導困難校からの立ち直り」を協働によって果たした

様子をお話いただきました。第2会場では行政側からの働きかけとして福井市教委の「小学校教育研究協議会」での授業研究体制づくりの取り組み、県特別支援教育センターの研修会の取り組みを報告いただきました。協働を仕組むきっかけは半ば強制的であっても中身が充実していれば「強働」は「共働」となりやがて「協働」として、前向きに動き出すという話が印象的で協働を仕掛ける側からの新たな視点が見つけれられました。第3会場では勝山市立鹿谷小から「赤とんぼの生態調査」や「外来植物除去」、春江工業高校からは「ものづくり」を通してエンゼルランドなどに地域貢献するという、子供が地域と協働する姿を報告いただきました。これまで言われてきた「やらされ感」、  
「教師側の温度差」、  
「強働」といった課題は、こうした活動の中の子供たちの「笑顔」にその解決のヒントがあるように思えます。ぜひ、次のラウンドテーブルの課題としていきたいと思えます。

## zone A / 福井県立春江工業高等学校 富田 裕之

今回の発表でラウンドテーブルに参加することになり、大学院でお世話になって以来の多くの方と久々の再会ができました。なかなか行事に参加できず、申し訳ない気持ちもあり、森先生からのご依頼を私でよければとお受けしました。

春江工業高校を広く多くの方に知ってもらいたいという観点から、毎年恒例になっている「春工のりもの広場」が昨年春工単独開催となり「おもしろのりもの大集合」としてエンゼルランドで開催できるようになりました。生徒、OB、職員等の約90名が中心となって、のりもの、ゲームコーナー、マイコンカー、紙すき、ワイヤークラフト類の全て春工オリジナル製品で子どもや大人まで楽しんでいただける催し物でした。

現春工では、熟成期になってきている企画を、いかに長く続けていくかということが重要になってきています。一昨年「たけだの響」という一大イベントを完成し、多くの力を結集した後、少し意気消沈になりそうな雰囲気、春工のりものを継続してきたことに

よって、職員のやろうとする気持ちを救った感じがします。生徒の内にある「相手を思う気持ちとやさしさ」を発見し引き出すことが教師の役目でもあり、教師もそうであるが、生徒にも「居場所」があれば、能力や気持ちを表すことができるということを再確認しました。

シンポジウムでの道関先生のお話のなかに、もらった賞金10万円を生徒の意気込みでワッペンにして17万円に膨らませるというお話がありました。このことは春工での活動でも生かせるのではないかというヒントをいただきました。「春工のりもの広場」や「おもしろのりもの大集合」は、身内での開催であり、そこで満足してしまえば発展はなくなります。また、広く多くの方々に知られているかということ、まだまだの所があります。少しずつでも新しいことや、楽しいことを取り入れながら、生徒主体の春工イベントが発展していき、ものづくりをとおして、生徒の心に温かい気持ちが自然と湧いてくるようなひとづくりになっていくことを期待しながら取り組んでいきたいと思えます。

## zone A / 福井県教育庁生涯学習・文化財課 道関 直哉

先日、中学生のいじめ関連のニュース番組を見た。教師を罵倒する保護者の声、学校を批判するゲストコメンテーターの発言に憤った。なぜ、このような状態に陥ったのか。荒れた学校というより、根なし草のように不安定な生徒集団が、何らかの不満によって先生批判に流れている学級に見える。先生の言葉は子どもたちに届かず、保護者の不安は、親同士の情報交換の中で学校批判へと高まっていく。こんな構図は日本中の学校に見られるのではないだろうか。これまでは「怖い先生」がこの状態を抑えてきた。先生に叱られ涙顔で教室に帰っていく友人の姿を見ることで、根な

し草集団は生徒らしくあるべき道を進むようになって行く。しかし、現在こんな指導は難しい。

では、どうやってこのような集団を安定した道に進ませるか。私は学校発の世論形成が効果的だと考えている。普段からマスコミと連携して生徒の良い活動を積極的に発信することで、生徒が真の学力をつけ、自らの行動に責任を持ち、保護者・地域の学校に対する評価と、学校への協力体制を高める。「発信するNIE（新聞を教育に）」と名付けた活動で、保護者・地域が学校とともに教育に参加しようとする世論形成につ



ながった実践を紹介した。

学校が社会に発信するためには、教育活動を包括する目標が必要である。教育の目的は生きる力を育むことであるが、それは何のためかと考えたとき、ESD（持続発展教育）の視点が最もしっくりくる。平たく言えば、「みんなが幸せに生き続けられる社会を作るための教育」ととらえ直すことである。部活動、学習指導、道徳など様々な教育活動も、ESD的に意義づけ

れば、発信型の学習に発展しやすい。活動に発信力を持たせるポイントは3つ。1点目はオリジナリティ。2点目は社会に対するメッセージ性。3つめはネットワークである。その道の専門家や団体と協力した子どもたちの「社会を良くする提言・活動」は、幅が広く独創的で持続可能性も高い。

今回、私は九頭竜川のゴミ拾いから、ゴミを分別し大人に警告のメッセージを送った取り組み等を例として、NIESD（新聞を活用した持続発展教育）を提言した。NIEとESDからの造語である。できることから、試行錯誤と様々な人との出会いの中で、楽しみながら取り組んだ実践である。特別なことではなく、「野球部が雪かき」や「中学生が施設訪問」といった活動を一ひねりすることで取り組みが発信力をもつ。誰もが幸せに暮らせる世の中を目指して、マスコミと連携して学校が声を上げること。それが学校自体の持続可能性さえ担っている。勝山北部中は、生徒の活動が評価され、今年度統合による廃校を免れることとなった。今回の発表で、地域を支える人材を育む学校、地域に支えられた学校とはどうあるべきか考える機会をいただいた。前園泰徳先生はじめ関係の皆様、熱心に発表をお聞きいただいた皆様に心から御礼を申し上げます。

## zone A / 板橋区立赤塚第二中学校 名地 太輔

福井ラウンドテーブル2013・サマーセッションに、赤塚第二中学校の教員5名が参加させていただきました。本校は福井大学教職大学院拠点校として3年目に入ります。福井大学教職大学院の先生方のお力を借りながら行っている本校の改革の力、それは人と人との「つながり力」です。今回も、福井の先生方ともつながることのできる機会をいただき、大変うれしく思っております。今回のラウンドテーブルで発表させていただいた内容もその「つながり力」です。福井大学教職大学院の先生方に教えていただいたことでもありますが、赤塚第二中学校では、学校作りや授業研究を、教科や学年の枠、職種を超えて、教職員全員で行っております。サマーセッションのテーマの1つでもある「協働」で支え合いながら研究を進めています。その1つの形として本校の研修会にも「ラウンドテーブル方式」を取り入れています。研修では、教職員自身の実践のプロセスや展開を出し合い、それぞれの実践記録を土台に実践の歩みを語っています。心に残っている場面やその時々を感じていたことを語り合う中で活動の場を共有し、生徒の成長のプロセスを探っています。「ラウンドテーブル方式」のよさとして、校種や職種を超えることにより、教育、実践を多面で多面的な見方ができるということがあります。そして、各グループで実践の過程をじっくり語り、聞きあい、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の自己の実践への問いの深まりを支える拠り所になっていきます。語ることは、過去の自己の実践を意味あるものに形づけ、今後の力に変えることということだと思えます。

私が今回所属させていただいたグループは、福井県に勤務されている先生方、教育学部の学生、教育委員

会に勤務されている方という多様な組み合わせでした。今回語り合う中で得たものの中で、改めて意識させられたものがあります。意外なものなのか、ラウンドテーブルの意図なのか分かりませんが、それは語り合うことによって「元気、力をもらえる」という精神的な部分での活力でした。語り合い、自己の実践と、聞かせていただいた実践を整理し、理論化していく作業の中で省察を行うことがラウンドテーブルの醍醐味と思っていましたが、このラウンドテーブルでは、前に進むための心の「力」をいただきました。

赤塚第二中学校は今年度より、「教科センター方式」という新しい校舎に変わりました。大方の部分については事前に予想し、自分たちなりに対応の準備はしてきましたが、それでも予測できなかったことや、予測はしていたけれどもやはりうまくいかないことが、ありました。そのようなことに直面した時、素晴らしい構造の新校舎を活かしきれていないことに対しての悔しさや悩みが生じます。それを今回のラウンドテーブルでは率直に伝えました。また、悩みを聞きました。お互いの悩みをその空間で共有し、互いに考えて意見を出し合いました。そして、率直な意見をいただくことで、「今はあまりうまくいっていないけれども、考えの大筋や方向性は間違っていない」という確信を持つことができたり、「気が付いていなかったけれど、ここがいつの間にか出来なくなっていたからうまくいかないのだな」ということもわかりました。そして、それらの意見を自分なりに吸収することにより、今後の自分の「力」になるという実感を得ることができました。

赤塚第二中学校の大きな「力」として考えている「つながり力」ですが、職場の人々だけではなく、いろいろな地域の人々となることができたおかげ

で、これが「学校」としてだけではなく、人が生きていくうえで大切な「力」なのだというを、今回のラウンドテーブルでは気付かせていただけたように思います。東京という離れたところにはありますが、また、「力」をいただくために参加させていただきま

す。そして自分も少しでも「力」を分けることができるとしたら、それは本当に素敵なことだと思えます。

このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

## zone B 教師：インターンシップは教師の職能開発に有効か？

zone Bでは「インターンシップは教師の職能開発に有効か？」をテーマに、いかなる「インターンシップ」や「教師塾」の取組が教師の職能開発にとって有効となりうるのか、また、教員養成および現職教育に関して教育委員会・学校・大学の三者がいかに協働することで質の高い教師を育て、教師の生涯にわたる継続的な学びを支え促すことができるのかなどについて考えていくことにしました。

まず、**session I**のポスターセッションでは、次のシンポジウム、フォーラムへとつながるよう、福井大学教職大学院の紹介とともに、実際に福井大学教職大学院の院生をインターンとして受け入れている至民中、丸岡南中、美浜中、福井大学附属中の取り組みや、院生の実体験報告、大学と協働して教員研修を行っている教育研究所の取り組みを報告していただきました。

**session II**のシンポジウムでは、前半、教育委員会が主導で教師塾を実施している京都市、東京都、横浜市の報告をいただきました。京都市では、教師になったばかりの教員が幼く、打たれ弱い状況があることから、教員になってからの研修ではなく、大学の段階で教師の資質・実践的指導力を高める必要があると考えるに至り、平成18年から政令指定都市の教師養成塾としては全国初の取り組みを開始したこと、教師採用試験とは連動しておらず、京都市にとどまらず全国の教師を育てるという気概で実施していること、志望者対象が小・中・高等・総合支援学校の教員、養護教諭、栄養教諭と多様なニーズに対応していることなどの報告がありました。また、東京教師養成塾は、将来リーダーになる教員の育成のため高い志をもった教員を大学生の段階から養成しようとするもので、平成16年開塾で10年目を迎える今年までに、塾生はほぼ100%東京の教員となっており、そのうち半数がすでに主任になっていることや、実習校として教師養成指定校を指定し、年間40日程度の特別教育実習も行っていることなど、教師としての資質・能力を育成するための様々な活動の紹介がありました。横浜市の教師塾（アイ・カレッジ）も、将来横浜市の教育をリードしていくリーダー的な教員の養成を目指しており、多くの卒業生が横浜市で教職に就いていることや、学校の授業を参観したり宿泊行事にボランティアとして参加するなど学校現場とのかかわりの中で、授業力や子どもとのかかわり方といった実践的な指導力の養成を図るなど具体的な取り組み状況を紹介いただきました。

コメンテーターの文科省の君塚氏と国立教育政策研究所の白水氏からは、これまで以上に教員には即戦力が求められることから、養成段階から大学と教育委員会が一体となって実践的指導力をつけることが重要となっており教師塾の意義は大きい、大学との議

論も大切だということや、教師としての指導力育成のためには、単発ではなく豊富で多様な実践的取り組みを行うことが重要であるなどの指摘がありました。また、学校を基盤とする体験が重要であり、なぜ現場体験がよいかを「正統的周辺参加」論に触れ、現場での実習により何ができなかったかを振り返ることで次にすることがわかり明日につながるからと説明した上で、しかしながら、状況をどう捉えるかが大切であり、省察だけで十分なのか、実践を支えるどんな理論が必要なのかなどについても考えるべきではないかなど課題の提起もありました。

後半は、まず和歌山大学の花本先生と川本先生から、県教委との連携・協働によるインターン制度を視野に入れた初任段階の研修の高度化を図る和歌山モデルの紹介があり、学び続ける教師像の確立を目指し、高度専門職の教師の資質の養成のための教育内容・方法等の在り方について、タブレット端末による情報の共有と振り返りによる学びの構築や、大学教員による校内研究指導など、初任段階の研修や教師としての学びの高度化をめざす様々な取り組みが報告されました。また、福井大学教職大学院の拠点校である中藤小学校の小林校長先生からは、ストレートマスターの院生が、毎週3日間の年間を通したインターンシップで実際に子どもたちの指導にかかわる中で、単発ではない一単元ずつのまとまった教材研究と授業実践の積み上げにより授業力が向上していくこと、目の前で展開される子どもと担任との柔軟なコミュニケーションや、子どものトラブルの対処法や学校の組織の在り方などで、子どもの実情に応じた指導の在り方について学ぶことができるなど、多くのことを学び、教師としての資質を向上させているという報告をいただきました。さらに、木村准教授からは、その話を受け、福井大学教職大学院で実施している「学校拠点方式」の長期インターンシップでは、院生がまさに教員の一人として教師の仕事の総体を学んでいることや、年間を通した学校教育参加により、学校の年間リズムの中で、子どもたちの成長発達を感じながら学ぶことができることなど、拠点校でのインターンシップの有効性が示されました。また、木村准教授は、教職大学院における週間カンファレンスや月間カンファレンス、集中講座、ラウンドテーブルなど、教職大学院での実践の省察・理論化・意味づけのための取り組みや効果について紹介し、本学の長期インターンシップのシステムが、実践経験とともに実践を記録化する時間、教材研究や生徒理解に充てる時間が多分に確保され、省察の機会の保証や省察の習慣化が図れること、学校改革や授業改善に取り組む優秀で高い意欲を持った現職教員たちと拠点校での実習やカンファレンスを通じて交流でき、貴重な実践を学ぶことができることなど、教師の職能



開発に極めて有効に機能していることを紹介しました。

後段のまとめとして君塚氏からは、インターンシップのとらえ方が大切であり、学生が自発的に学んだり答えのない課題に取り組んだりどのようなプログラムを開発するかが重要であることなどのコメントや、学部生が身に付けなければならない最小の力が明確に

今回初めて福井大学教職大学院ラウンドテーブルに参加する機会を得ることができた。教育センター学びの丘に勤務していた頃より、「理論と実践の往還」を具現化し、全国から福井に集うラウンドテーブルの熱気を是非一度経験したいと思っていた。この4月に交流教員として和歌山大学に異動し、初任者研修の高度化モデルに取り組んでいる。6/29(土)、「zone B 教師：インターンシップは教師の職能開発に有効か?」で、その内容の報告を行った。

この事業は、昨年(2012年)8月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の中で述べている「当面の改善方策～教育委員会・学校と大学の連携・協働による高度化」を初任段階において、①教育委員会と大学との連携・協働による初任段階の研修の高度化を図り、②初任段階の教員を複数年にわたり支援する仕組みの構築を、和歌山大学と和歌山県教育委員会のコラボレーションで生み出したものである。

初任研高度化モデルは、中教審答申の中心的概念である「学び続ける教師像の確立」を、優れた教師になるための出発点としての不可欠な資質、生涯にわたり自己を成長させていくその根源的な力の育成に視点を変えた基本理念として位置付けている。

この事業に参加する18名(小8, 中4, 特支6)の初任者は、研修プログラムのすべての内容を別立てで行っている。内容は、①月1回、年間11回合同カンファレンスと1泊2日の宿泊研修、②課業日週1回の自校カン

なっていないなど大学の教職課程の問題点についての指摘もありました。また、白水氏からは、現場重視、実践と省察、学校丸ごと体験、学部生・院生のコラボレーション、協働学習など、和歌山県と福井県の共通する点についてのコメントや、教師の協働学習のための意識改革の事例として、埼玉県でのジグソー法を用いた協調学習の取り組みの紹介などがありました。また、学ぶことは多いがもう少し絞らないと大変ではないかなど、福井大学の取り組みの課題についても指摘がありました。今後の実践に可能な範囲で活かしていきたいと思います。

最後のsessionⅢのフォーラムでは、シンポジウムの内容であるインターンシップや教師塾の有効性や課題についてグループで自由に話し合いをしました。予定時間を過ぎてしまい全体での議論は十分できませんでしたが、教師の職能開発にとっての有効性については共有された部分が多かったようです。しかし、より実効性のあるものとするには課題も多く、今回のテーマは、継続して追求すべきものではないかと思えます。できれば次回のラウンドテーブルにもつなげていけたらと考えています。

## zone B / 和歌山大学教授 花本 明

ファレンス、③和歌山大学大学院における集中講義科目・土日開講科目の受講を可能にした大学院における学びの高度化、を主な内容としている。

本事業には、大学院教員8名、県教委との交流教員1名、実践的指導力を有した退職校長からなるプロジェクト教員3名、関係市町村教育委員会、協力校校長、協力校における自校指導員など多くの関係者が関わっている。キーワードは「省察的気づき」であり、「自らの実践を振り返り→自ら考え→気づき→実践に活かす」という活動を繰り返すなかで、学び続ける教師としての基礎的な資質を養っていくことを狙っている。

この4月からスタートしたばかりであり、事の成否はこれからの取組にかかっているが、全国初の先進的な事業として、発表後も多くの参加者の方より質問や激励のお話を頂戴し、また、他大学のシンポジウムに招待を受けるなど関心が高く、気の引き締まる思いであった。また、今回のzone Bでは教員養成における「インターンシップ」に焦点を絞った議論は、学校ベースで初任者の高度化をめざす本モデル事業と大いにリンクするところがあり、多くの知見を得ることができた。

課題として、教員養成及び現職教育に関して教育委員会・学校、大学の二者がいかに協働することで質の高い教師を育て、教師の生涯にわたる継続的な学びを支え促すことができるのか、この点が問われている改めて確信した。

## zone C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする

今回、zone Cは福井市教育委員会生涯学習室及び福井市中央公民館との共催の下、福井駅前のAOSSAに会場を移して上記テーマをめぐるセッションを進めました。

session I のポスターセッションでは、福井市・越前市の公民館や福井大学の学生の活動を柱に、参加者が互いの実践を交流する空間がAOSSA内のアトリウムにひらかれました。開放的な空間が効果的に活用され、ふと足を止めてポスターをご覧になる一般の方々も交えながら、セッションが文字通りコミュニティにひらかれていく可能性を強く感じさせる時間になりました。



session II では、松江市古志原公民館館長の竹谷氏、NPO法人コミュニティワーク研究実践センター事務局長の穴澤氏、そして、福井市円山公民館主事の松井氏に登壇いただき、人・組織をつなげることの意味とコーディネーターの役割をめぐる事例をもとに議論を深めました。変化する地域社会の中で人・組織が何によってつながり直すのか、また、それをつなげるコーディネーターに求められる力量とは何か。竹谷氏からは「目的縁」を媒介にしたつながりの創出とその拠点となる公民館の姿、穴澤氏からは「互いを必要とされる関係性」と地域の「つぶやき」を感じとるコーディネーターの役割が提起されました。

この問題提起を受け、session III では、小グループを組み、参加者相互の実践の共有と交流を通じてさらに議論を深めました。新しい世代の学生主体の活動、地域の自治と学習を支える公民館の取り組み、企業活動や公的諸機関、さらには学校と地域の連携といった実践報告から、さまざまな事例からコーディネーターの役割がふりかえられ、熱気のこもった議論が交わされました。

「持続可能なコミュニティをコーディネートする」、それ自体が持続的な検討を要する本質的なテーマであることを再認識しながら、これからもより公的にひらかれたzone運営を進めていきたいと思えます。

## zone C / 東京学芸大学大学院教育学研究科 伊藤 央

2日目のラウンドテーブルでは教職大学院の学生で特別支援学校の先生のお話が特に印象的であった。「自らの研究で全員の先生に授業記録をとってもらいたい。しかし、これは独りよがりな考えかもしれない」という悩みを持っていたことを報告していた。ひとりひとりの先生に「やらされ感」をもたせないようにという気持ちから全員に授業記録をとってもらおうのをすすめることを躊躇していたとも言っていた。しかし、先生は困り事やよかった実践について雑談という形式で相互交流するしくみをつくらうとした結果、授業記録について賛同されたり、もっとこうすれば良いのではないかという意見をもらえたという。私はこの「雑談のように」という点が重要ではないか思っており、先生もその点を重要視しているようであった。

zone Cのポスターセッションにおいて福井市の公民館主事さんが「公民館を利用している男性たちが農協の駐車場に車を停めて、自販機の周りでたむろしているという情報を聞き、公民館の廊下にその場所を移してもいいよという提案をした」というお話を聞いたことも印象的であった。自然発生的な地域住民たちの井戸端会議を公民館へ移すことによって地域住民の居場所を創出した公民館主事さんの行動力はすごいと思う。目的をもちずに自由に集うことのできる場所が地域にあり、そこで仲間同士が雑談をすることができるということはとても良いと思った。

私は東京都多摩地区の立川市で、行政と協働して市

民が市民へ学習機会を提供する団体に関わっていた。その団体は活動拠点を持たず、地域の公民館などで市民向け講座を行っている。国分寺市でも、公民館を拠点に市民が市民に向けて講座を企画するという活動に関わっていた。この2つの活動は中身を見れば講座を企画するという点で同じであるが、国分寺市では講座の中に必ず参加者同士の交流の時間が設けられている一方で、立川市では知識教授型の講座がほとんどで講座の中に交流は含まれていなかった。立川市の団体では「参加者同士の交流」という課題が挙げられていたが、未だに実践は難航しているようだ。国分寺市での活動は何かを成し遂げるような目的を持たない緩やかな集まりが数年間行われていて、同じ地域で活動する団体を巻き込んで活動が広がっている。地域で拠点



を持ち、交流の場やしくみづくりがあるかどうかで地域活動の雰囲気だけでなく、活動の内容までも変わってくるということをこれら2つの活動から強く感じている。

今回のラウンドテーブルでは学校での相互交流の学びの場の立ち上げのプロセスや公民館における地域住民の居場所の創出など、分野・地域を超えて自由な交流の場を設けることの意義について考えることができ

た。私が研究している住民主体のまちづくりにおいても、それぞれ違う背景を持ってきた地域住民が協力して主体的に活動していけるしくみづくりというものが重要になってくる。今回のラウンドテーブルで得ることができた「確固たる目的がなければ集えないということではなく、目的をもたずとも肩肘張らずに集い、雑談できる場」がそれぞれの分野・地域の活動にもたらず役割を今後の研究に生かしていきたい。

## zone C / 福井市社西公民館 長尾 陽子

福井大学の公開講座を受講するようになってから、「話す」(自分の思い、考えを頭の中でまとめ、言葉にして伝える)という場面が多くなりました。というより、この講座は専らそれを行い、お互いの実践を聞きあいながら、その積み重ねの中から学んでいくのが目的ですから、当然と言えば当然ですが。

「書く」(自分の考えをまとめて文章にする)ことはとても難しいことですが、「話す」こともまた同様に難しく感じています。頭の中に浮かんだことを、思いつくままに言葉にしていただけではやはり伝わらないのでしょうか。話し終えた後も自分の中では消化不良状態で、後に何とも言えないもどかしさが残ります。今回のラウンドテーブルでもそれを実感しました。

私にとってこの福井大学ラウンドテーブルへの参加は2回目です。1回目は公開講座を受講し始めてそう間もない今年の3月でしたが、やはり発表する先生方の話は聞きやすく、感心しながら聞いていたのを記憶しています。それから3ヶ月しか経っていないのですから、そうそう成長しているはずもなく、今回もまた同じ思いを味わい、伝えられないもどかしさを感じていました。そのことをその場で言うと、うまく話そうと思わなくていい、自分の言葉で話すことが大切だと言われ

ました。なるほど言われることはもっともですが、そう簡単にできたら苦労はしません。あとは場数。やはりこれからの公開講座で場数を踏んで訓練していくしか道はなさそうです。

実践を重ねた先生の話には説得力があり、経験(特に失敗や挫折)からの言葉には、自分が経験したかのように共感できる部分や感動できる場面があります。今回のラウンドテーブルでもそんな体験ができました。中でも心に残った一人の先生の話は、生徒に頭から牛乳をかけられるというショッキングな事件から始まりました。赴任してきたばかりで担任を任せられ、校長から期待されているんだというプレッシャー、前任校での経験や成果を活かしたいという意気込み等々、やる気に満ち溢れていました。そんな中で学校を休みがちなる生徒がいました。当初はそれほど問題はなかったのですが、だんだんと生活態度も悪くなってきたため、意を決して嫌がる家庭訪問を行い、指導に力が入って行きました。前任校での似たようなケースでも、何度も家庭訪問を行い粘り強く対応した結果、次第に改善していった経験があったため、自信を持っていました。しかしその事件で、少々問題があっても生徒に真正面からぶつかり、粘り強くやれば必ず通じるはずだという思いは無残にも打ち砕かれてしまいました。それが今までの自分を振り返るきっかけとなり、教職大学院での学びへと繋がって行ったのですが、先生の話の中で心に残っているのは、「先生は何もしてくれなかった」という言葉におびえ、粘り強く一生懸命の「押し付け」をすることは自己満足でしかなかったという言葉でした。人は窮地に陥れば陥るほど、周りが見えなくなり、ただがむしやりに突き進んでしまいがちなかもしれません。そこで一度立ち止まり、冷静に自分を見つめることができるようになれば、その時点から立ち直ることができるでしょう。

失敗や挫折というものは当初はそのことに触れられることすら辛くても、ある程度の時間をおき、自分の中で振り返られるようになったあと、それを「語る」という作業は自分の中でそれをさらに昇華させ、血や肉とすることができるのではないかと。失敗が人を成長させるというのはまさにこのことなのだと思います。私自身、失敗や挫折は出来ることならしたくないと思ってしまいます。でもそれを恐れて先へ進めなくなってしまうことだけは避けたい。多少の壁にぶち当たりながらも一歩ずつでも先へ進み、そこから学んでいくことが自分を成長させてくれるのだと信じて、これからも主事の仕事に取り組んで行きたいと思っています。



## zone D 授業：授業改革の扉をひらく／教師は冒険者であるべきか

zone Dのsessionでは、素晴らしい3人の実践者（鳴門教育大学附属小学校教頭 宮本浩子先生：岐阜市立長良東小学校教諭 岩見光洋先生：金沢大学附属高等学校教諭：外山康平先生）を報告者としてお迎えし、「授業者は冒険者であるべきか」という問い立て授業改革の扉を探っていった。終わってみると、「授業者は冒険者であるべきか」という一つの問いから派生した実にたくさんの「問い」が生まれた研究会であった。それから2週間後、この企画を担当したスタッフたちで、今回のsessionについて振り返る機会を持った。すると、ここでもまた、3人の報告者や参加者の方々の熱い志から受けた刺激が再燃してきたかのように、新たな「問い」が次々と表出されてきた。それらの「問い」のいくつかを取り上げ、話し合いの内実を振り返ることで、スタッフにとっても今回のSessionの場における学びが深いものであったことを伝えたい。

### 問1 「スタッフ自身は冒険者であったか」

「コーディネーターを務めた富永氏がいなくても、あのような充実した話し合いの場をつくることができたのであろうか。」企画そのものを揺るがしてしまうようなこんな厳しい「問い」を投げかけたのは、立ち上げ時からずっとzone Dの企画者として携わってきたスタッフであった。

今回のsessionⅢの活動において、sessionⅡの報告者たちの課題が参加者一人一人の「これまで」や「これから」の課題へと見事に押し上げられていく様を実感しなかったものはおそらくいなかったであろう。なにより、sessionの回を重ねるごとに高まる学びの質のようなものをどうにか感じられるようになってきたという声も上がっていたのにもかかわらず、このような「問い」を投げかけたのである。

当然のごとく、この「問い」は、スタッフたちに大きなゆさぶりをかけるとともに、それぞれの心の中に潜ませていた「わだかまり」に気付かせるきっかけをつくった。それは、富永氏という大冒険家の後についていくサポーターに甘んじていいのかといった自責の念かもしれない。あるいは、自らが汗を流す冒険家になれなかった悔しさだったかもしれない。「冒険家」をキーワードにしてsessionの場を見事に動かした富永氏の姿が鮮烈な印象として蘇ってくればくるほど、自らの立ち位置を問い正さずにはいられなかったであろう。ともあれ、この「問い」は、企画者としての私

たちを成長させるものとして、しばらくは向き合っていくことになるであろう。

### 問2 「次回につなげていく課題は何か」

「教科の授業づくりにおける共通課題を見つけたか」と、スタッフの一人が振り返りの視点としてこう切り出した。すると、sessionⅡの3名の報告者たちが立てた学習課題の質の豊かさとその共通点について語ったスタッフの意見から、「質の高い問いの設定」についての議論が始まった。校種も教科も教職年も異なる3名の実践者たちによって生み出された「学習課題」は、いずれも「自己をより豊かに活かすための学習課題」であり、「自己成長を促すための批判的思考力を育むことを意図した学習課題」であったからである。そして、「このような問いを学習課題として設定する力こそ、授業改革への大きな鍵になるのではないか」、「問題解決学習から探究的活動への転換は問いの質が鍵を握るのでは」といったような、今回のsessionへと続いていきそうな「問い」へと進化していったのである。

### 問3 「『～したい』といった課題の表出こそが大切ではないか」

結局のところ、スタッフの熱いふり返りの場においても、最初の「問い」から派生する「問い」はいくつも生まれたが、「授業者は冒険者であるべきか」という「問い」に対する考えを収束させていくような議論は生まれなかった。ただ、その「問い」をもっていたことで、無意識に働いた思考もあったのではないかとも思う。話し合いの中で、「『～すべき』ではなく『～したい』といった課題の表出こそが大切ではないか」という新たな「問い」が生まれたとき、スタッフの多くが「なるほど」と頷かされたことも、その一つではないだろうか。その新たな『問い』の中に、険しい山を見ても「のぼりたい」と思うことができる「冒険家」の姿を重ねて見たかもしれないからだ。

すると、「次回のsessionのテーマは、〇〇にすべき」ではなく「次回のsessionのテーマは、〇〇にしたい」という思いがスタッフ一人一人の中に芽生えていたら、私たち自身にとって、それが「授業者は冒険者であるべきか」という「問い」を立てた一番の成果であるといえるだろう。

## zone D / 岐阜市立長良東小学校 岩見 光洋

今回、福井大学ラウンドテーブル2013に参加が決まり、正直、期待と不安があった。それは、1日目のzone Dの提案があったからだ。準備の段階で、「授業改革の扉を開く」というテーマいただき、どのように提案するとよいのか、随分悩んだ。

一日目、私を含めた3人が提案した。2名の方の提案

は、私にとって学ぶべきことばかりだった。なにより、提案してくださった2名の先生には、失礼ながら同じ日を過ごした、同士のよう思いになった。このような会に参加させていただき、こんな思いになれたことは、幸せに感じている。

提案後、会場の皆さんで、小グループに分かれ、私たちの提案についての意見を交流する場が設けられ

た。正直、私は人見知りなところがあり、出会ったばかりの人、それも他県で、いろんな学校種の方と、この時間を共有できるのか最初は不安だった。しかし、そんな不安もすぐになくなった。ファシリテーターの方に私たちをつないでいただけたおかげで、すぐにたくさん話を聞きたい、話したいという気持ちになった。1日目の終了の時には、もっと聞きたい、もっと話したいという気持ちにまでなった。

それは何故か。どんな地域でも、どんな学校でも、教師として『児童・生徒に楽しい授業、分かる授業を提供したい』という強い思いをもった方がたくさんいることを知ることができたからだ。

また、そうした、強い思いをもった方々と考え方や方法を共有できたからだと思う。

それぞれの先生方が、日々授業力を高めるためにはどうすればよいのかを考え、努力を重ねていることをひしひしと感じた。私は、そうした話を聞いているとわくわくしてきた。

2日目、新たな出会いがあった。異年齢、異業種の仲間ができた。一日ゆっくり語り合えた。いつもの、職場では感じられない感覚。多様な立場からの多様な話。どれも新鮮だった。特に、学生の方や異業種の方の話からたくさんの刺激をもらった。もっと頑張らねばと思わせてくれた。



こうして、あっという間の2日間。参加させていただき、本当に刺激になった。栄養剤をもらったようだった。私は、常に実践者でありたい。子どもたちのために、日々子どもたちと高まり合いたい。そして、子どもたちの笑顔が見たい。そんなことを再確認させていただいた2日間だった。

こんな思いにさせてもらえた人たちに感謝したい。ありがとうございました。また、機会があれば参加させていただきたい。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻



## ラウンドテーブルを振り返って

スクールリーダー養成コース2年／越前町立朝日中学校 林 明宏

五感のすべてで感じた一部始終を言語化しようと、帰宅してすぐにこの原稿を書いている。

ラウンドテーブルへの参加はこれで3回目となる。この集まりは、なぜこれほどインセンティブなのだろうか？ 県外参加者が多いことに驚かされる一方で、休日を返上して参加しようという動機には頷けるものがある。

本誌のバックナンバー上で日程や内容については、さんざんアナウンスされてきた。したがって、これらを縷々記すことは避け、ここでは私の心に響いたキーワードを順に述べ、参加報告に代えさせていただく。

### 子どもから学ぶ

参加したzone Dのsession IIで、発表者の岐阜市立長良東小学校教諭の岩見光洋氏が述べた言葉である。岩見氏は現状に決して満足することなく、理想の授業を追求する求道者として独自に研鑽に努めた結果、この考え方にたどり着いたのだそうだ。

教師は、子どもたちの学びの場である「授業」を組織することを使命とする。我々は「教える」という言葉の持つイメージから、教師の役目を知識や技能を子どもたちに「与える」仕事ととらえる。岩見氏の言葉は、学習

者である子どもの様子に目を向けることが、授業改革の第一歩であることを教えてくれた。我々教師は子どもからヒントを「与えられる」存在なのである。経験年数の長短を問わず、常にこのような謙虚さで授業づくりに臨む存在であり続けたい。

### 違う視点を持つ人との出会いが力量形成につながる

同じく1日目のsession IIIで、「何が授業改革を成功に導いたのか」という問いに対して、あるグループが発表した言葉である。

私は中学校に長年勤務している。これまで授業について語る相手は、同じ教科の教師ばかりであった。だが生徒の学びを成立させるという点では、担当教科が違って教師の仕事は同じである。

最近、担当教科の違う教師が集まって自主研究会を持った。たいへん新鮮な学びがあった。参加してくれた他の教師たちからも同様の声を聞いた。

また今回、2日目の実践報告会において、小中学校の教師に大学の教官や現役大学生を加えた小グループで、発表を行った。ここでもまた様々な学びがあった。

このように違う視点を持つ人々とテーマを共有する

ことにより、思いもよらない切り口で有用な意見をもらえることが、身にしみてわかった。

行き詰まったら、とにかく相談してみる。必ず閉塞状態を脱するヒントを得ることができる。このような自信を得た。

### 教師の平均値をいかにして上げていくか

北海道のある教育委員会の指導主事と思われる方の発言の一節である。近い将来、教員の年齢構成が大きく様変わりし、中堅といわれる年齢層が極めて薄くなる。したがって経験の浅い教員も、一定の指導力を身につける必要がある。教員の同僚性を高め、協働して力量形成していくことは、この現実からの差し迫った要請でもあるのだ。この方の発言にあった「各自で授業力向上に注力しても、それは一人の“名人”が生まれるだけで終わるのではないか？今の課題は教員全体の平均値をいかにして上げていくかである」には大いに納得させられた。

福井県も同様の問題が指摘されている。私も中堅教員として、自分自身が力をつけることはもちろん、職員全体の力量アップに貢献できる方略を模索していかなければならない。

### 自分にしかできない授業づくり

1日目のsessionⅢの際、お互いに別の県に勤務する若い先生が二人同席した。新任時に管理職から奇しくも似たような話をされたという。「あなたにしかできない授業をきなさい」と。一口に「よい授業」といっても、何か一定のフォーマットがあるわけではない。このことが授業づくりを困難にしている一方で、ロマン

に満ちた作業にもしている。

「自分にしかできない授業」。これは私にとっての新しい視点であった。発言した彼らは、理念だけが先行し、自分の授業には全く納得ができないそうである。だが、彼らが自ら進んでこのラウンドテーブルに参加した事実は、上司の励ましが時間を経た今でも、彼らを突き動かす強力なモチベーションとなっているということを物語っている。

授業づくりは教師が、教師であり続けるために、永遠に全身全霊で取り組むべき最大の仕事である。

私も若い二人に触発され、自分の授業づくりに新たな視点を加えるつもりである。

### 授業者は冒険家でありたい

1日目 sessionⅢの最後で、ファシリテーターを務めた教職大学院講師の富永良史氏が述べられた決めゼリフである。

実はzone Dの問いは「授業者は冒険家であるべきか」であった。それが当日の論の展開を見て、富永氏が我々の気持ちを代弁してくれたのである。

「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」ドイツの教育学者ジェステルリッヒの言葉である。チャレンジャーとなって絶えず研鑽に励む教師の真摯な姿勢が、子どもたちの学びを良い方向に導くことは想像に難くない。

2日間、様々な「人」や「見識」との出会いがあり、濃密な時間が過ごせた。私の頭の中は、心地よい疲労感で真っ白になった。今回の学びによって得た新たな知見を、私自身の取り組みだけでなく、学校全体に還元したい。

## スクールリーダー養成コース1年／越前市武生第三中学校 青木 敏之

参加するにあたり、どのような特徴を持った組織が長期にわたって持続・発展していくのか、押さえるべきポイントは何かについて学びたいと考え参加した。学校内での各取り組みを組織化し持続可能な体制への移行、地域との連携も視野に入れた組織づくりの大切さを多くの実践例から学ぶことができた。

ポスターセッションでの雲浜小学校の授業力向上への取り組みにおいて、どのような活動をして子どもたちの思考の流れに対応していなければ教師主導でしかなく、その状態では子どもが1時間取り組むことは難しい、活動を子どもの思考の流れに合わせてやること



大切であるとおっしゃっていた。教師の協働を考える場合にもあてはまり、研究指定を受けたからやらなければならないというスタンスでは、子どもも教師も不適應を起こしてしまい期間が過ぎれば自然消滅してしまう。強制的な協働から、能動的な協働へと変化させることが持続させるためには大切で、期間がいったん終わった後、意欲が沈みかけているものをどうやって引き上げるか、そのためのマネジメントが大切だと考えた。赤塚第二中学校の実践は、荒れていた学校が落ち着き、これを持続・発展させるための手段として授業に焦点を当て取り組んでおられた。推進にあたってはコアメンバーがとても大切で、業務は増えるが、子どもをこうしたい、元には戻りたくないという気持ちを大切にしておられた。教員が異動して方法だけが残るのではなく、教師の思いを語り伝えられる組織作りが重要だと感じた。

シンポジウムでは、「協働をつくりだす」のテーマで2つの実践報告を聞いた。NIEとESDを組み合わせた活動はとても興味深かった。NIEを始めるにあたって、無理をしないことと協働体制を作っても持続可能性がなくてはいけないをコンセプトに、身近なことから取り組まれていた。実際、組織の規模を超えた大きな目標を掲げても人数や意識の差などから頓挫してしまうことが多い。カリキュラム全体をマネジメ

ントする者が、各教師の主体性を重視し、従来の行事を使って無理なく取り組むことによって、新たな展開が生まれてくる。同時に地域へ発信することで周囲の変化にもつながっていく。その過程がよくわかった。身近で小さな事から取り組み、頼れる人たちを次第に増やし、外部にもネットワークができあがってゆけば、やがて大きな流れを生み出し、いろいろな事へ発展していく可能性を感じた。気仙沼市の実践は、市全体での取り組みで規模が大きかった。協働を作り出すことが大切で、イベント的な行事は一過性でしかなく、いかに探求的なカリキュラムを作り出すか、それが体験的・実践的になっているか、未来へ向けて創造的になっているか、コーディネートする側には常に検証が必要である。小中高と長く緩やかに学んでいくシステム作りがなされており、地域や専門機関と連携することで教師の知識不足や経験不足を補っていた。

ラウンドテーブルでは、子どもがわかる授業程度では満足しなくなっていることが話題になった。わかりやすい授業は塾やインターネットで簡単に手に入る時代である。学校へ子どもを集める意味は、子ども達が考え、話し合っ、成果の繰り上がってくるような、お互い顔を合わせなければできない授業が大切になっ

てきている。教師も展開に合わせて取り組みを変化していかなければならない。知識基盤社会となり、知識をいかに活用するかが重要で、知識を教え込むだけでは子どもは伸びなくなっている。そういったことから、学校自体も学びをデザインし直す時期に来ているのだと感じた。

今回、どのような構成の組織が長期にわたって持続し、発展しているのかに注目して参加した。実践にはいくつかの共通点があった。組織を構築するにあたり、現在の教員が異動した後までも含めた長期的展望が重要なこと。各取り組みや周囲の機関を連携させる場合、つなかりに余裕を持たせ、それぞれの独自性を失わせないこと。外部との連携では、学校が主導し、イメージデザインを行うこと。各校の伝統を大切に、それぞれの特徴を活かした構成にすること。周囲に理解者を増やしていくことで、効果が上がることが伝われば、さらに多くの他者が連動して動いてくれること。そして最も大切なことは、子どもの学びのために教員の組織を変化させていくという意思の統一、そして一貫性があること。私も学校行事を活かした組織の再構築に取り組もうとしているので、今回学んだことを活かし、実践につなげていきたい。

## 教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校インターン 加藤 儀直

### 1. インターンシップの意義と教師の力量形成—なぜ、長期にわたって行なうのか (zone B)

1日目のzone Bでのセッションは、「インターンシップは教師の職能開発に有効か」というトピックで議論が展開された。session Iでは、本学教職大学院の報告と、インターン先の学校(至民中学校)の報告を拝聴することができた。本学の木村先生からは、教職大学院で行なっているインターンシップの概要の説明があった。続いて、至民中学校の研究主任である高間より、至民中学校の研究の展開に加えて、ストレートマスターのことについての報告があった。最後に、本学教職大学院のM2の院生より、昨年度1年間のインターンシップについて、報告が行なわれた。ここでの議論をふまえて、session IIとsession IIIでは「インターンシップは、教師の職能開発に有効か」というトピックで議論が展開された。

シンポジウムでは、大きく分けて2つの立場から報告があった。1つは、教育委員会(行政)からの立場で、もう1つは、大学からの立場であった。

行政からの報告は、全部で3本の報告があった。大きな枠組みとしては、Fig.1の通りである。毎年塾生を募集し、およそ9ヶ月間かけて塾生は、開講される講座を受講する。講座の期間中、特別な試験等は行われませんが、受講生には教育委員会の指導主事より、模擬授業のポイントや指導案の書き方等を教わるいい機会となっているようであった。大学からの報告は、和歌山大学と福井大学からの報告であった。福井大学からは、長期インターンシップの紹介と、ストレートマスターとスクールリーダーの院生が協働で“学ぶ”こと

が教師の力量形成とどのように関わってくるのかが報告された。

### (1) 理論と実践をいかにしてつなぐか

1日目のセッションで大きく対立していた点は、「理論」と「実践」についてであった。教育行政の立場からは、「採用後に即戦力となる人材を確保したい」という思いがあり、その点では教師塾は有効であるという話を聞くことができた。ようするに、大学の教員養成では十分に信用ができないということである。この点に関しては、福井大学では学部の教員養成段階からしっかりとした共通の理念のもと、県と協調的に教員養成改革について取り組んでいるので、福井県では教師塾は必要のないことであると感じた。

\*福井大学教育地域科学部教員養成スタンダード平成24年度版を参照されたい。

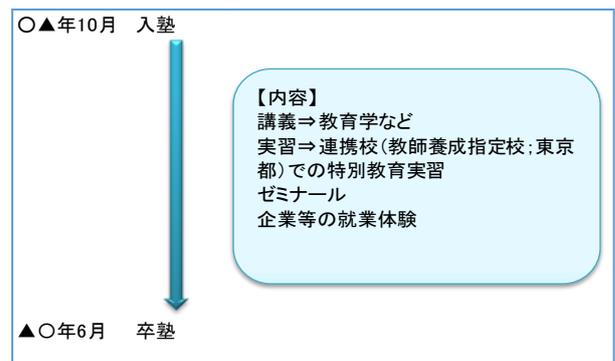


Figure 1 : 教師塾年間計画概要

しかしながら、自身に突きつけられた課題は深刻である。それは、2年間という期間の中で、具体的にどのようなことが培われるのか、その輪郭をはっきりとしたものにする必要があることだ。この点に関しては、筆者は「理論」と「実践」をいかにしてつないでいくかという点が、一つの手がかりになると考えた。

### (1-1) なぜ「理論」と「実践」なのか

インターンシップを行なう中で、何度も当たってきた「壁」、それは、「なぜ『理論』なのか」という問いであった。学部4年間で学んできたことは、理論的なことはたくさんあったものの、学ぶ時は常に「子ども」という対象がそこにはいなかった。そのため、現場での具体的な実践を描くことは正直、困難に近かった。このような状態でインターンシップを始めたので、「理論」と実際に目にする「実践」との間にズレが生じてしまった。

理論と実践との「ズレ」を感じるようになってからは、授業を見る視点は“非難的”であった。しかし、①学校の現実、②生徒の実態に目が向くようになってからは、授業を“非難的”に見ることは少なくなっていた。おそらく、“実践する”ということについて、「実践」だけが優れていても、「理論」だけが優れていても駄目だということを感じ始めたからであろう。ある理論に沿って実践をすることが最善なのかと言われれば、そうでもなく、現場での実践を一つの事例として、その検討を通して新たな理論を生成していくこと。これが、より大事になると考えた。

つまり、現場での実践に重きを置いて実践を展開す

ること、さらには、そのような「場」で長期インターンシップを行なうことは、早い段階から高いレベルで実践の検討等ができることが私達、ストレートの院生には有効であると考えている。

セッションの最後に、コメンテーターの白水先生は次のことを提言した。「インターンシップが子どもの（多様な）学びを協調的に吟味できるものになれば、インターン生、メンター、教育委員会、研究者全員にとって有効」（傍点筆者）と。つまり、短期的な実習では培うことができない事柄が、長期インターンシップの中に埋め込まれており、現場の教員と同じリズムで学ぶことに、意義があると改めて感じた。

### 2. インターンシップは教師の職能開発に有効か？

今回のラウンドテーブルでの議論を整理する中で、改めて大きな問いに戻ってみると、インターンシップは教師の職能開発に有効であると考えている。ただ、インターン生の立ち位置によってそれは大きく変わると考えられる。インターン生だからという理由付けで自らの行動を制限するのではなく、「一人の教員として」ということを常に考え続けることを通して、初めて「インターンシップ」が職能開発、さらには、力量形成に有効なものになると考える。

#### 参考文献

Rychan, D. S., Salganik, L. H.,

2001 *Defning Selecting Key Competencies*,

2002 Hogrefe & Huber Publishers.

佐藤 学 2000 「学び」から逃走する子どもたち 岩波ブックレット No.524 岩波書店

## スクールリーダー養成コース2年／小浜市立雲浜小学校 富士 健一

今回で4回目の参加となります。毎回思うのですが、日々の忙しさや数々のストレスの中で自分自身の立ち位置を見失いそうになっている時、様々な方々との対話や交流を通して元気と刺激をいただき、「子どもたちのため、学校のために、地に足をつけて頑張るぞ」という気持ちを取りもどすことができます。この4月から初めて教務主任になった自分にとって、ここ3ヶ月あまりの自分と学校、そしてこれまで5年間の雲浜小学校での歩みを授業力向上の原点に戻って振り返るいい機会になりました。実は、今回のシンポジウムでは「zone D」に参加して、「授業者は冒険家であるべきか？」という課題を考えていきたいと思っておりましたが、M2としての役割の関係で「zone A」へ参加することになりました。

「zone A」session I のポスターセッション発表では、5年前に小浜市の授業力向上研究指定校の第1期校として出発し、現在に至るまでどのようにして子どもたちを変容させ、教員間の協働を生み出してきたのかを、説明させていただきましたが、諸般の事情で事前準備が出来ず、ぶっつけ本番でものすごい緊張と空回りをしてしまいました。決められた時間の中で目的を達成出来る効果的なプレゼンテーションの力というのは、周到な準備によってこそ生み出されるものだと思感しました。一方で、子ども中心の授業による子どもの育ちと雲浜式ワー

クショップ等の授業研究による教師の成長といった点に興味を持って下さった方からの質問を通して、「はじめに子どもありき」の視点で、方法論を出発点とはせず理念の追求と理論の構築に軸足を置いて効果的な方法を導き出すという実践研究は案外なされていないのではないかという印象を受けました。

session II の気仙沼教育委員会の及川幸彦先生のご発表では、東日本大震災の被災によって持続不可能な状況に見舞われながらも、ESDを基本理念として復興に前向きに取り組み、その中で、新たな自然との共生、地域を愛する復興を行う人々の力強さに大きな感銘を受けました。

県教育庁生涯学習課の道関先生のご発表では、「自分たちの声で社会を変える」をスローガンに、地域社会に向けて社会を良くするための自分たちの主張を新聞への積極的な発信を通して展開していくプロセスに感銘を受けました。本年度よりNIEの実践校となった本校においても、無理をしないことと、効果的な手段や方法を選択して実績を作ること、教師の主体性を尊重して個々の役割を明確にしていくことが大切であること、新聞を受け身的に活用するだけでなく発信性を高める手段として活用していく必要を感じました。

Session III のフォーラム2では、中藤小学校の佐野先生

と一緒にコーディネーターをさせていただきました。福井市教育委員会の大野喜美先生の小学校教育研究会の組織と研修体制づくりに関するご発表、県特別支援教育センターの野村陽子先生の学校現場を支援する研修体制の変革に関するご発表それぞれに、グループ対話と全体対話を進めていきました。各の立場や価値観、役割が違っていると、立ち位置のブレや温度差との戦いが生じていきます。システムや体制を整備するのはブレや差を埋めていくためであり、そうやって協働を生み出すことで、個人も組織も成長し成熟出来るように感じました。

2日目のラウンドテーブルでは、明治大学の平川景子



先生を司会に、東京大学附属中等教育学校の越智豊先生のご報告と、私自身の報告をもとに協議を行いました。子どもの主体性を大切にしている先生方の考えを聞いていると、多くの共通点が見出されます。子どものモチベーションと先生の立ち位置との関係など、本校や小浜市が進める授業づくりの根幹にあたる部分の共通点が多々ありました。2人の報告の共通点は、「子どもを主体とする学びとそれを支える教師がどうあるべきか」という問題提起にあったように思います。教師と子どもの意識のズレやものの見方のズレ、つまづきや苦しみのとらえ方のズレなど、様々な思考のズレを可能な限り埋めていくのが、子どもに寄りそうことであり、子どもの思考の流れを大切にすることであるように思います。そのような子どもの主体性を大切にできる学校を創り出すことの出来る「協働」とは、「強制」でなく、「共生」によって生み出されるものであり、人材の育成、目的や意義の理解、理念の共有を図っていくことが大切であることをあらためて感じました。教師側の都合だけで子どもたちをコントロールするのではなく、子どもたちの生活そのものが授業の中で表現され、授業での学びが生活に生かされることで、彩り豊かな生き方を発見していける子どもを育てて行きたいとあらためて思った2日間でした。

## 教職専門性開発コース1年／啓新高等学校インターン 船木 知憲

6月29、30日と2日間にわたって行われましたラウンドテーブルについて報告いたします。1日目は**zone D** 授業改革の扉をひらく―授業者は冒険家であるべきか―に参加しました。

**session I** では、様々な実践の紹介が、ポスターと、その場での説明を通して行われました。私が見たのは福井大学の探究ネットワーク「FFC」と「福井まちかど調査隊」です。2つとも、福井大学教育地域科学部の学生が、地域子どもたちと年間を通して、総合的な学習を行っていくというものです。発表を聞いている中で、彼らの取り組みが教職大学院のインターンシップと本質的には同じだと私は実感しました。それは「子どものより良い成長を考える」という点においてです。授業はあくまでも手段の一つであってそれ自体が目的ではないのだと考えるきっかけにもなりました。

発表をしていたメンバーはおそらく全員が一年生だったと思います。発表を聞いた後、「この活動を通して子どもにどうなってほしいですか？」という質問をしました。すると、彼らは、まだ入学してせいぜい数カ月しかたっていないにも関わらず、それぞれが明確な考えを持っていて、教育を志すものとしての意識の高さに感銘しました。もしできることなら、人生に迷っていた大学一年生時の自分に「しっかりしろ！」と言ってやりたいものです。正直学ぶことだらけでした。経済学部出身の私にとって、現役の教育学部の学生と交流する機会というのがとても新鮮だったのです。

次に、**session II** では宮本浩子先生（鳴門教育大学付属小学校教頭）、岩見光洋先生（岐阜市立長良東小学

校教諭）、外山康平先生（金沢大学付属高校教諭）による授業実践報告が行われました。どの先生方も教職にかける想いが人一倍強く、学ぶことだらけでした。どれも15分という短い時間では語りきれない内容だったように思います。

**session III** では**session II** で話された先生方の報告についてグループで話し合いました。話し合いを通して、よりよい授業実践のためにはやはり「人との出会い」が大切だと思いました。そして、出逢いを単なる物理的接触で終わらせるか、価値あるものにできるかは心のあり方次第なのだと考えました。私自身できる限り人を受け入れることのできる広い心でいたいものです。

一方で、時には「捨てる勇気」も大切だとも思いました。経験の少ない私にとって確かに先生方の助言は魅力的な宝の山なのですが、すべてを一度に吸収することは残念ながらできないように思います。それは、小舟にたくさんの重い金銀財宝を積み上げ沈んでしまうのと同じです。ここで、私の高校時代の部活動の例を挙げます。当時陸上競技の競歩で、数多くの優れた指導者に出会い、ご助言を頂きましたが、あれもこれもしようとするうちに、かえってフォームが崩れてしまったのです。顧問の先生からそのことを指摘され、今の自分にとって何が一番良いのかに重点を置き、フォームを改善し、タイムを伸ばすことができました。すなわち今自分が本当に必要な物を見極めるためにあえて捨てるのです。ここで注意していただきたいのは、「捨てる」という行為は数多くの情報を得た上での判断であり、決して最初から話を聞く耳を持たないという消極的な意味ではありません。大切なお助言

を自分のものにするために積極的に「捨てる」ことを選ぶのです。

2日目は、3人の報告者からの発表とそれに関してグループで話し合いが行われました。福井県の教育現場に限らず、北海道、神奈川県、東京などで様々な活動されている先生方の話を通して、教育についてより広い視野で考えるきっかけができました。福井県のみでは見えていなかった世界が見えた気がしました。

数多く貴重な話が聞けたのですが、その中でも特に印象的だった内容が、「最近の若者は失敗することを極端に恐れている」「失敗することをよしとしない文化が若者の自己肯定感を低くしている」というものです。最近の若者の一人として、そのことはよく実感しています。やはり私は失敗することが恐ろしく、失敗したらそれで終わりと言うような感覚が自然と備わっ

ています。そのことから、「失敗してもいいんだよ。」と言える場を授業で積極的につくっていく必然性を感じました。また、「失敗してもいいんだよ」と言える場をつくることは、自分自身の教育にもつながるように思います。失敗を恐れるように育ったことを恨むのではなく、それを社会的に望ましい方向へと転換していきたいものです。

教育者の一人として、これからの時代をより良くしていきたいという気持ちが強くなったラウンドテーブルでした。また、様々な価値観を持つ方々との出会いはかけがえのないものだったと思います。他の先生方にとってもそうであったことを願っています。最後に、ここまで読んでくださった方へ、私の文章でもぜひとも「捨てる勇気」使ってくださいることを期待して、報告を終了いたします。

## スクールリーダー養成コース2年／福井県立武生東高等学校 野坂 智裕

6月29日は「授業改革の扉をひらくー授業者は冒険家であるべきかー」いうテーマを掲げたzone Dのセッションに参加した。ここでは鳴門教育大学附属小学校の宮本先生、岐阜市立長良東小学校の岩見先生、金沢大学附属高等学校の外山先生がそれぞれ発表なされ、ご自身の体験を語られた。

外山先生は授業改善プロジェクトのメンバーとして、数学という他教科から見て生徒同士の学び合いが少ないと感じられる科目で、学び合いを授業にどう取り入れていったかについて発表した。多様な解法が内在し、生徒にとって取り組み甲斐のある適切な難易度の問題を提示してグループによる話し合いを行わせたところ、計8つの異なる解法が提示され、そのうち3つは教師が事前に予測できなかったものであったという。特に投票でベストアンサーに選ばれた「積分による解法」は秀逸で、それを聞かされた生徒の反応もすばらしく、この授業の感動は忘れられないものになったと話された。岩見先生はソフトバレーボールを使った体育の授業の実践を紹介した。中学校でバレーボールの授業が成り立ちにくい現状から子どもの実態と活動欲求を考察し、小学校で何ができるかを追求した先にこの授業が生み出された。そして子どもたちがソフトバレーを通じて何をうれしかったかを調べ、以下の3点を把握する。第1は「ボールがきた時に進んで触れることができた(意欲)」、第2は「思った所にボールを返せた(技能)」、そして第3は「頑張って拾ったボールがつながって得点を手に入れた(連携)」である。それを更に実感してもらうため、ボールが落下してしまった地点の記録の集計を調べるなど客観的に試合を観察させ、グループ会議を繰り返して個人の技能と他者との連携力をアップしていったという。そして勝敗を超えてソフトバレーが好きになっていく子どもたちの様子を述べ、最後に「子どもの実態から学ぶことが大事。子どもの感動する姿が私の原動力になっている。」と結ばれた。宮本先生は、30年にわたる宮沢賢治の『やまなし』の授業実践を振り返り、自分がどのように成長してきたのかを語られた。作品のディテールにとらわれ子供たちに多様なとらえ方や内面を問うことをさせていない21歳の教育実習の



授業記録から始まり、課題解決型の展開を取り入れ、学習の記録の確認と更新を繰り返して行わせることで子供自身に自分の考えの変容を体系的に自覚させている35歳の実践記録。ここでは国語の力を単に分析的にとらえるのではなく、人間力に結びつくような発展的、総合的なものとしてとらえようとしている姿がうかがわれる。そして「なぜ震災後の今、賢治の作品が多くの人に読まれているのだろう」「12歳の自分は、賢治からどんなメッセージを受け取ることができるだろう」といった単元を貫く問いを位置づけ、子どもたちに賢治からのメッセージを受け取る自分を常に意識させながら作品に取り組みさせている51歳の実践へと内容は深められた。

この後行われたセッションでは、当初「冒険」という言葉のイメージから「授業ではリスクな冒険はやってはならない。つまりこのzone Dのテーマには問題がある」という意見もあった。しかし「発表された先生方の授業改革のエネルギーはどこから生まれているのだろうか」という疑問に対する答えのなかに、「生徒とのすばらしい授業をイメージする力」という意見があり、自分もこれが弱いから、あるレベルで自己満足しているのではないかと気づかされた。つまり無目的な旅に出るという冒険は授業でやってはならないが、今ここに留まっていれば十分安全だとしても

尚、すばらしい目的地を知ってしまったが故に旅立っていきたくらいというものであるならば、その冒険は意味あるものではないかと思うようになった。もちろんそこには情熱もなくてはならないし、支えてくれる教師仲間がいればもっと素晴らしいものになるだろう。

この稿では1日目の感想が中心になってしまったが、2日目のセッションも爽りあるものだった。特に印象深かったのは、福井大の松田淑子先生の「知識基盤社会」の説明と「総合学習の可能性」についての発表

だった。その中で東北の仮設住宅で作られ販売されているアクセサリーの実物をお見せになり、これをどう授業で生かしたのかについても紹介された。この話を受けて東京大学海洋教育促進研究センターの鈴木先生が「知のヒエラルキーと崩壊」について話されたが、これも興味深かった。鈴木先生は以前から福井大に関わりをお持ちだったそうで、「僕は福大教職大学院のファンです」と自己紹介で述べられた様子がとても清々しく、こういった先生方の話を聞く機会を与えてくださった教職大学院に改めて感謝したいと思った。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属小学校インターン 北村 元輝

6月29日、30日に行われたラウンドテーブルに今年も参加しました。これで学部時代も合わせると4回目の参加になります。私自身にとってこのラウンドテーブルは様々な立場の方と交流し、自分自身を振り返ることで、次のステップに向けての一つの大きな節目になっています。今回も残り半年程になった大学院での学びの方向性を様々な先生方から与えて頂いたと感じております。



さて、私にとって今回のラウンドテーブルは今までとは違い、私自身とても緊張して迎えました。それは報告者として2日目のクロスセッションに参加しないといけなかったからです。3月に開催されたラウンドテーブルでも報告をさせていただいたのですが、その後も自分の中で実践を再度捉え直し、常に自分の中で変化・成長している実践の意味・価値をどう聞き手の先生方に伝えることができるのか、そこに悩んでいたからです。3月とは違い、聞き手を意識しながら、そして実践の動的な部分を報告したいと考えていました。

2日目のクロスセッション、テーブルには小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・大学・国立教育研究所と全ての教育段階の先生方で構成されていました。私の報告の中で特に先生方に伝えたかったこととして、①子どもの姿を見取ることの重要性とその方法②実践後すぐの省察だけでなく、機会がある度に省察すること③インターンシップを行う院生としてインターンシップ制度に思うところ、以上3点でした。①と②については先生方からの意見もいただき、ベテランの先生方でもその重要性については日々感じていらっしゃるということでした。また現場に入ると忙しさなどで難しくもなるので、学生の間にも習慣になるくらいま

で、①と②については取り組んだほうが良いというアドバイスをいただきました。そして③のインターンシップ制度については私の実際に感じたことと報告書に記した部分を話しながら報告をさせていただきました。その中で国立教育研究所の白水先生から「なぜ北村君の中でこの2年間の経験が10年後、20年後に役に立てば良いと思えるようになったのか。ある意味この2年間を割り切って考えることができるようになった背景を教えて欲しい。」と質問されました。私が報告書の中で記した「インターンシップについて、講師とインターンシップでは学びの方向性が違うこと」についての質問でしたが私の中でははっきりとした思いはあるものの、それを改めて問われると上手く言葉にすることができませんでした。そこで白水先生から「もっと一つひとつの経験を振り返って関連付けて北村君にとって価値付けた方が良い。この2年間の経験は北村君にとって意味があるもので、それを10年・20年後により活かそうと考えたら、今丁寧に振り返ってみた方が良い。そうすると関わってくれた先生方の言動で北村君が成長したことが自分で見えてくるから。」と言葉をかけていただきました。正直自分自身では今回の報告で1年目のインターンシップで経験したことを個々で意味・価値付けることはないのではと感じていましたが、経験を積んだ先生や教員養成にも関わっていらっしゃる先生から見ると、もっと深いところまで経験を私の中に落とす必要があるということが分かりました。不安で仕方なかった報告でしたが、こうして自分を拓くことでそこに歩み寄ってくださる先生方がいらっしゃることに改めて感謝するクロスセッションでした。



# 院 生 紹 介



栃川 正樹 とちかわ まさき

この4月に福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学させていただきました。栃川正樹です。教師生活は、講師経験を含めると今年で20年になります。数字にすると驚くばかりですが、これまでを振り返ると自分には「これだ!」と言えるものがないまま、ここまで来てしまったように思います。そのため、何かを掴みたくて入学を決意したというのが、本音でしょうか。そんな私が、ここまでやってこれたのは、言うまでもなく、周りの先生方の支えがあったからです。新採用校は敦賀市の中学校。大規模校に5年間の勤務で多くの先輩方から、教科指導や生徒指導など本当に数々のことを教えていただきました。時には、自宅に寄せていただき、貴重なお話を聞かせていただくなど、幸せな出会いもありました。部活動で広がった県内各地の先輩方とのネットワークも大きな財産です。惜しげもなく、技術指導のあり方や生徒との向き合い方について教えてくださいました。これらの教えは、「人と人とのつながりを大切にしたい学級」を心がけている私の原点だと考えています。また、人とのかわりが深く、人情味あふれる池田町で教鞭を取らせて

いただいたことも、大きな要因であると思います。現在、福井市豊小学校に勤務させていただいております。豊小学校は、昨年まで福井大学教職大学院拠点校であり、自主研究発表会はこれまで8回開催されています。また、5年ぶりに研究主題が変わりました。その中で今年度、初めて研究主任の校務をいただき、大きな重圧を感じています。プレッシャーだけが大きくて、何もできていないのが現実ですが、「協働」の精神のもと、多くの先生方と一緒に学ばせていただくという気持ちを大切にしていきたいと思っています。また、研究主題に沿って自身の専門教科も研究していきたいと考えています。

自主的に参加させていただいた3月のラウンドテーブルでは、県外から参加された先生の「学び合い」の発表にとっても共感し、そのことを電話で伝えました。これをきっかけに、今ではメールでやりとりさせていただいています。カンファレンスでは、校種の違う先生方やストレートマスターの院生と学んでいます。院生の中には、大学時代の同級生たちもいて、その再会に大きな刺激を受けています。これらの出会いの中で、様々な意見を聞きながら、今までの自分を省察し、実践につなげることで、学び続ける教員として成長できればと思っています。これから2年間どうぞよろしくお祈りします。

自主的に参加させていただいた3月のラウンドテーブルでは、県外から参加された先生の「学び合い」の発表にとっても共感し、そのことを電話で伝えました。これをきっかけに、今ではメールでやりとりさせていただいています。カンファレンスでは、校種の違う先生方やストレートマスターの院生と学んでいます。院生の中には、大学時代の同級生たちもいて、その再会に大きな刺激を受けています。これらの出会いの中で、様々な意見を聞きながら、今までの自分を省察し、実践につなげることで、学び続ける教員として成長できればと思っています。これから2年間どうぞよろしくお祈りします。

ださる先生のいることがとても支えになりました。その経験から、私自身も支援の専門的な知識を身に付けていきたいと考えるようになりました。さらに、その知識をもとにして子ども達が居場所を感じられる学級経営や、学力の向上と定着を図るための授業改善等をしていきたいと思うようになりました。



玉村 伸一 たまむら しんいち

今年度より、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました玉村伸一です。現在、勝山市立荒土小学校に勤務しています。今年度で本校の勤務は2年目になります。本校は、今年度から2年間コア

ティーチャー養成事業の指定を受け、算数科で「基礎・基本の習得と活用する力をつける指導の工夫」の主題で研究をしています。私も5月に算数の公開授業を行いました。教職大学院の先生方には事前研究会からご指導いただきとても参考になりました。

私は、学校現場で働き始めて17年近くが経ち、様々な子ども達と接してきました。その中で、いろいろな面で支援を必要とする子ども達が増えていると感じています。これまでにも、不登校や学習障害などの様々な支援を必要とする子ども達を担任してきました。不登校の子どもを担任したとき、校長を中心に生徒指導、養護教諭（教育相談担当）、スクールカウンセラーなどと連携し、保護者との教育相談をくり返しながら対応をしてきました。幸いなことに、その子は半年で普通に登校できるようになりました。クラスでも生き生きと生活できるようになりました。そのとき、専門的な知識をもとにした対応策を考えてく

このようなときに教職大学院入学のお話をいただき、目の前の子ども達のために自分が力をつけられる機会をいただいたと捉え挑戦することにしました。

教職大学院では、「子どもがいきいきと学校生活を送るための支援」をテーマに研究と実践をしていきたいと考えています。4月からの合同カンファレンスやラウンドテーブルは、小学校経験しかない私にとって、いろいろな校種の先生方と実践を紹介し合え、考えを話し合えることで、多くのことを学べる機会となっています。これまでの自分の実践を語り、それについていろいろな先生方と話し合うことで自分の教育実践を見直す機会にもなっています。子ども達をどのように見取るのか、子どもを褒めて認めることの大切さなどを学びました。そして、学んだことを目の前の子ども達と学校のために生かしていきたいと思っています。今後とも、どうぞよろしくお祈りいたします。

ださる先生のいることがとても支えになりました。その経験から、私自身も支援の専門的な知識を身に付けていきたいと考えるようになりました。さらに、その知識をもとにして子ども達が居場所を感じられる学級経営や、学力の向上と定着を図るための授業改善等をしていきたいと思うようになりました。



## 古市 利明 ふるいち としあき

今年度より教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した古市利明です。現在、福井市至民中学校に勤務して2年目になります。教科は社会科です。教員生活18年目となり、これまで小学校で6年間、中学校で11年間勤務してきました。

これまでの教員生活を振り返ると、それぞれの勤務学校では、たくさんの先生方に支えられながら、自分に与えられた仕事を精一杯取り組んできました。しかし、40歳を過ぎてから、自分自身、年相応の仕事をしていかなければならない、支えられるだけでなく、周りの先生方や学校全体を支えていくことも必要ではないかと、強く思うようになりました。このような中で、至民中学校への異動が決まり、当時の校長先生から教職大学院の話がうかがえました。突然のことで戸惑いや不安がありましたが、何か新しいことにチャレンジする良い機会と受け止め、教職大学院の受験を決めました。また、昨年度の6月と3月に行われた「福井ラウンドテーブル2012」に参加したことも、教職大学院受験の大きなきっかけとなりました。ラウンド

テーブルでは、全国各地からの学校関係者や様々な職種の方が集まっていました。小グループにわかれて、参加者が自分の実践を語り、まわりの人たちがじっくりと耳を傾け、聴き合う空間がそこにはありました。どんな様子かもわからずに参加した私も、学校関係者のお話だと、至民中学校や今まで勤務してきた学校での経験と比べながら話をしたり、聞いたりすることができました。また、違う職種の方の実践を聞いても、自分の仕事と関係することが見つかり、多くの学びを得ることができました。

現在、至民中学校は様々な課題を抱えていますが、教職員みんなが、至民中学校をよくしていこうという共通目標があるため結束力は強いです。日々、生徒、保護者、地域そして私たち教職員にとっても「安全・安心な学校」をめざして、目の前にいる生徒たちと共に歩んでいます。大学院ではその歩みの様子をテーマにして研究を進めていきたいと考えています。大学院での学びはまだ始まったばかりですが、これからの2年間、多くの方々に支えられながら過ごすことになると思います。勉強させていただいていることに感謝し、自分のできることを精一杯努力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。



## 稲木 穰 いなき みのもる

本年度より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました、啓新高等学校の稲木 穰です。担当教科は英語です。センター入試の対策問題の解説から、三単現のSの復習まで毎日教材研究に追われる毎日です。本年度は、普通科進学コース1年生の担任をしています。クラスの半数の生徒が昨年度より新設された硬式野球部の生徒で占められていて、その多くが他府県出身の生徒です。そんな彼らに囲まれていると、毎日が人気テレビ番組『秘密のケンミンSHOW』状態で、福井県出身の生徒にもいい刺激となっているようです。

私の勤務する啓新高等学校は、昭和2年創立の福井精華学園を母体とする私立学校です。昨年度学園創立85周年、高校設立50年、啓新高校となって15年という節目の年を迎えました。本校の建学精神である「真・善・美」「行学一路」に基づく個の完成を目指すためのキーワードを「可能性の挑戦」として掲げて教育活動を行っています。本校は9年前の平成16年に福井大学との連携協定を結び、翌年の平成17年4月より学校長が教職大学院の前身の福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コースに入学したのを機に、授業改革プロジェクトチームが編成されました。その後本校が教

職大学院の拠点校になり、平成21年度より毎年1人ずつ教職大学院に入学して学ばせて頂いています。

また平成21年度より、授業研究に対する意識を学校全体に広げていくことを目的に有志が集い、授業研究会が立ち上げられました。設立当初は、なかなか他の教員の改善すべきポイントについては指摘しにくい雰囲気があり、率直な意見交換が常にできていたとは言えなかったようです。でも現在の授業研究会では、教職大学院の先生方のお力添えもあり、メンバーが大変活発に意見を出し合い、話し合っている姿が毎回見られます。同僚同士がお互いの枠を超えて、授業を良くし、学校を良くしていこうとする教員同士の協働コミュニティができたことは大きな一歩ではないかと考えています。

また本校は教職大学院のある福井大学文京キャンパスとは芦原街道を挟んでほぼ向かい側にあります。先日もこの「地の利」をいかして、多くのストレートマスターの院生の方々や、先生方が本校のさまざまな授業を参観していただいたことは、我々にとっても大いに刺激になりました。

これからは、新たな視野を啓くために、多くの専門的な情報や理論、みなさんの熱い思いにふれることができたらと願っています。今後ともよろしくお願ひいたします。



## 竹野 亨 たけの とおる

今年度スクールリーダー養成コースに入学した福井市藤島中学校の竹野亨です。平成元年に新採用となり、25年目を迎えますが、これまでたくさんの先生方に支えていただいて、

仕事を行うことができたと感じています。

最初の勤務校大野市有終西小学校では体育主任の仕事をしていただきました。業間のマラソン(学校の裏にある亀山を走って登る)といった活動や各行事の私の提案に対して、校長先生をはじめ、まわりの先生方から建設的で温かいご意見をいただき、まだまだ未熟であった私が気づけなかったことを、他の先生方が陰でたくさんフォローしてくださったおかげで、無事に活動を終えることができていました。たくさんの先生方と協働させていただいた、この体育主任の経験が今現在の私の教員生活の礎となっていると思います。

福井市にもどってきてからはずっと中学校の勤務ですが、どの学校においても生徒指導が中心で、どう生徒と向き合っていくか、どう生徒を育てていくかを考えてきました。また、物事に取り組むときには学年の先生や学校全体で共通理解することや、保護者や地域の方々と連携することの大切さを学びました。数学の教員としては、地区中教研数学部会の活動に多く参加させていただきました。「数学的な見方や考え方」とはいったいどの

ようなものか、「数学的な活動」「伝え合う活動」を授業で取り入れていくためにどうしたらよいかなどを、授業実践を通して意見を交換し合ったり、書物を読み解くことでたくさんのことを学んだと思います。

現任校藤島中学校に赴任して3年目を迎えています。本校は昨年度よりクラウド制という縦割りの活動に取り組んでいます。体育の授業や年3回の各学年の活動報告をするクラウド集会、ボランティア活動、合唱コンクール、文化祭や体育祭で活動を行っています。先日行われた合唱コンクール(1,2年合同で行う)では、各クラウドごとに課題曲「明日という日が」を歌い、その後各クラスの発表という順で行いました。どのクラウドやクラスも、真剣さが表情や歌声から伝わり、一所懸命努力してきたことがわかりました。これまでの縦割りで活動の成果を感じ、これからの活動にも大きな期待が持てると感じました。

今年度から教務主任の仕事をしていただいております。教員の協働をどう推し進めていくかが私の仕事となると考えています。これまで私を支えてくださった先生方の言葉を振り返りながら、落ち着き安定した学校にするための教育課程のあり方、活発化した授業づくりのための研究主任のサポート等、これまで担任として考えてきたことをもとに、教務主任の仕事に当たっていきたいと考えています。またこれが教職大学院の研究テーマになってくると考えています。



## 中村 敏明 なかむら としあき

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました中村敏明です。現在、坂井市立丸岡南中学校に勤務しています。これまで、松岡中学校・永平寺中学校・春江中学校・三国中学校と勤務させていただき、それぞれの学校で、生徒会活動や生徒指導な

ど、いろいろな貴重な経験や勉強をさせていただきました。そして、この丸岡南中学校での勤務も3年目となりました。本校は、県内で初めて教科センター方式を採用して、丸岡中学校から分離新設された学校です。創設以来8年目を迎え、創立当時のことを知る先生は一人も在籍しない状況となりました。そのような中、今年度より教務主任を任せられ、日々緊張の中、学校生活を過ごしています。

本校の研究主題は、「学び合う学校文化の創造」です。本校の学校文化は素晴らしいものがあると思います。異学年による縦割り集団であるスクエア制をもとにした「スクエアDAY」や「スクエア道徳」、生徒の主体性を

尊重した学年集会や体育祭運営などが、その代表的なものです。また、地域連携の面でも、素晴らしい学校文化があります。夏休みには「PTA夕涼み会」が開かれたり、文化祭の日には、保護者が駐輪場で焼きそばやフランクフルトなどを準備してくださり、それが生徒の昼食となったりします。このような学校文化が創られてきた今、私が最も関心を持っているのが、「学び合う授業」はどうあるべきかということです。本校は、「授業における小グループでの話し合い活動」、「全教員による公開授業」、「異教科の教員による授業研究グループ」などをすでに実践しています。そうした中、学校生活の一番の基本である授業における、深まりのある話し合い活動の難しさを感じています。

この1学期間、合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加させていただき、この答えにつながるようなことを、たくさん学ばせていただきました。これまでの素晴らしい先行実践に関して、発表を聞いたり、文献を読んだり、またそれに関して大学の先生方から助言をいただいたり、毎回刺激を受けています。今後2年間、教職大学院での学びを丸岡南中学校での教育活動に生かしながら、「学び合う学校文化」をより質の高いものにして



## 野尻 友佳子 のじり ゆかこ

この4月にスクールリーダー養成コースに入学しました野尻友佳子と申します。現任校の藤島高校に勤務して8年目になります。福井大学までは歩いて5分、走って(趣味がマラソンなので、走ることは苦になりません)2分、という恵まれた環境です。

昨年度3年生の担任をしている時に校長先生からお話をいただき、教職大学院を受験することになりましたが、書類、レポート、面接、入試、といったことを、受験生の担任業務の合間にこなすことには非常に苦労しました。しかし、生徒たちと同じ「受験生」という連帯意識を持てたこと、入試の緊張感を共感理解できたこと、そして、晴れて大学院生になり、多くの方々と交流する中で日々多くの発見ができることを考えると、勧められてよかったです、と思います。

京都府の小学校を皮切りに、教員生活も25年目となります。学級担任、授業、校務分掌の仕事、部活動顧問・・・と様々な業務があり、退屈という言葉を知らない「教師」という職業を楽しんでやっているうちに、こんなにも年

月がたっていました。私の周りを見ると、意欲的に授業研究をしていらっしゃる先生、様々な面でリーダーシップを発揮していらっしゃる先生など、尊敬すべき方々ばかりです。さて、自分自身について改めて振り返ってみますと、「自分の仕事」を楽しむ(あるいはこなす)ことで精一杯だった気がします。中堅、ベテランと言われる「年齢」になって、これではよくありません。唯一、自信を持てる場所は「パワフル」「元気」なことくらい。それなら、その面を生かして、通常業務と教職大学院とを両立させていこう、そこで学んだことを新たな活動に生かしていこう、と考えています。

入学して3ヶ月、合同カンファレンスやラウンドテーブルで、様々な校種、様々な立場の方々のお話を聞いて、新しい視野を獲得でき、わくわくした気分を味わっています。これまで、「高校」という枠組みの中でしか考えてこなかったことがどんどん新しくなっていく気がしています。長い教員生活が第2ステージに入りました。私の究極の目標である「楽しい人生を送れる人を育てる」ということを、またこれまでとは違った視点から模索していきたいと考えています。



## 召田 幸司 めすだ こうじ

教職大学院に研究生として長野県から来ています召田幸司です。中学校に勤務し続け18年。目の前の様々な問題に取り組んだり、授業を考え実践したり、クラス担任として子どもたちと接したり、地域と連携したりと様々なことがありましたが、走りながら実践してきた年月だっただけだと思っています。しかし、教職人生も折り返し地点に立っているのだと思った時に、今までのようにただただ走るだけでいいのだろうかという疑問が、自分の中に芽生えてきました。どうせ走るなら、「方向性」をもって走りたい。そんな時に、教職大学院の松木先生に私は出逢ったのでした。先生のもとで学んでみたい。教職大学院で学んでみたい。福井で学んでみたい。そんな思いが、長野県教委に通じ、長期研修として私が福井に行くことを許してくれたのでした。

私には、三つの研修テーマがあります。それは、「子ども同士を繋ぐ学校づくりをどう進めていけばいいのか」、「教師同士を繋ぐ学校づくりをどう展開していけばいいのか」、「地域と子どもを繋ぐ学校づくりをどう実践していけばいいのか」の三つです。春からの約4ヶ月間、私は大学院の計らいで安居中学校に

入らせていただきました。ご存知のように新校舎で学び始めて二年目の、子どもたちも先生方も勢いのある中学校です。学校づくりという視点で研修を積もうと考えていた私には大変勉強になる学校でした。異学年集団による「清掃活動」、「教科係活動」、「校舎案内」、「リーダー研修会」、「宿泊的行事」、「思い出語ろう会」などは、まさに生徒同士を繋げる仕掛けでした。さらに全校研究会は、教職大学院の先生や小学校の先生方も交えた学び合う協働体(コミュニティ)としての議論であったことを考えると、同僚性以上のコミュニティがそこにはあり、私の考えている以上の枠組みにおける協働研究がなされていると感心させられました。また「赤ちゃんだっこ体験」、「職場体験学習」の実践は、キャリア教育として地域と連携をとりながらの教育実践であり、私にキャリア教育の視点をより与えてくれました。

誰かが言った言葉に「機械は燃料と潤滑油があれば動く。人間は志や夢や希望がなければ動かない」というものがありますが、安居中学校にはそういった志や夢や理想が先生たちはもちろん、子どもたちにも共有されているように思います。学校づくりの考え方という「方向性」が自分の中に生まれつつあることを嬉しく思う福井での日々となっています。



## 山本 寛 やまもと ゆたか

今年度から、教職大学院でお世話になることになりました。スクールリーダー養成コース1年の山本寛です。どうぞよろしくお願いいたします。これまで23年間にわたり、

4つの高等学校で数学の教員として生徒達の進路実現を支援する仕事をしてきました。昨年度より福井県教育研究所教職研修課勤務となり、先生方の力量向上を支援する場にフィールドを変えて仕事をさせていただいております。

教育研究所での主な業務の内容は、教員を対象とした研修と所内での協働研究会の企画・運営です。

研修では、5年経験者研修、臨時任用講師研修、ミドルステップアップ研修、幼稚園新採用研修等を担当しています。特に、5年経験者研修では、若い先生方が自信を持って教育活動に取り組めるよう、教育実践研究を通して教科指導力の向上を支援させていただいております。教育実践研究は、自分の授業の課題を見つけて、その課題解決のためのテーマに沿った授業実践をしながら、記録し、その記録を基に省察をして次の授業に活かしていく、というサイクルを続けていくものです。この方法は、福井大学教職大学院の教員養成の

システムに近く、学び取れる部分が多岐に感じています。したがって、研修をする側の立場としてこの学習システムの中に身を置き、実際に自分が成長する体験をすることは、教育研究所での先生方への支援にも役立つのではないかと考えています。

協働研究会は、教育改革が進む中、山積する様々な課題に対応するために開かれていたものです。5年前に教育研究所が教職大学院の拠点校の1つとして位置づけられて以来、継続して行っており、今年度からその推進役をさせていただいております。月に1回全所員が集まって、各課のそれぞれの強みを活かしながら、学校支援スタッフとしての力量向上や研究の深化を図るための協働研究を行ったり、今後の教育研究所の役割や在り方についての勉強会を行ったりしています。

教職大学院には、様々な校種や年代の先生方が集まっています。そのため、現場からの様々な声をお聴きできるのではないかと大いに期待しています。また、直接コミュニケーションをとりながら先生方と協議をすることで、自分自身を成長させると共に、教員研修機関としての研修・支援の改善に少しでも役立たせたいと考えています。



## 船谷 友代 ふなや ともよ

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました。現在勤務している福井県特別支援教育センターからも自宅からもほど近い福井大学は、以前から身近な存在でしたが、学ぶために通うとな

ると、これまでとは違った姿にみえてきました。開講式、門をくぐるときには、不安よりも、新しいことに出逢える期待の方が少し大きかったように思います。

大学院で学ぼうと思うようになってから、自分が育った環境や学んできたことを思い返すことが多くなりました。まずは小学生の頃…。私が通う小学校には、当時、3つの特殊学級がありました。バスで通学している子とバス停で出会うものの、横には並ばず、少し離れて歩いてきたことを思い出します。どういう子なのか気になるけれど、何となく、本人や先生に尋ねるのはいけない気がしていました。高学年になったある日、担任の先生が、「時間と元気が余っている人は、何かお手伝いをしてもらっちゃい」と私たち多くの女子を特殊学級に送り出してくださいました。「この子は質問には答えられないけれど、なぜ地名を全部漢字で書けるの?」「この子は階段を上れるのに下りられないのはどうして?」たくさん湧いてくる疑問を、ときには先生やその子のお母さん

に尋ね、ときにはその子と遊びながら答えらしきものを見つけ…そのうち、お手伝いでなく一緒に遊ぶようになっていました。そして、お母さんのようにその子たちを大事にしている担任の先生に、あこがれのような気持ちを抱いたことを覚えています。

大学進学を控えた高校生の頃…。教職への道を思い浮かべ、障害児教育に関するコースを選びました。大学では、学習障害のある子どもたちと、遊んだり勉強したりする機会を得て、試行錯誤の日々を送りました。大学卒業後、ほんの数年で、当時“学習障害”といわれていた子たちの一部が“高機能自閉症”といわれるようになりました。これからは、医学や教育の上での捉えや考えなどが目まぐるしく変わっていくであろう分野だと聞かされ、最新の情報にも敏感であらねばと思知りしました。

このような道をたどって教職に就き(寄り道もたくさんしてきましたが)、特別支援学校勤務を経て、現在の役割をいただいています。

これから、自分自身や組織、地域を様々な角度・視点から見つめとらえていけるよう、アンテナを高く張り巡らし、大学院で出会う多くの方々とのつながりも大切にしたいと思っています。



## 谷 康博 たに やすひろ

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました谷 康博です。専門科目は工業の建築です。よろしくお願いいたします。

さて、福井県内に工業科を有する高校は数校ありますが、建築を含む建設系の学科

を有する県立高校は現在2校しかありません。実際、私は異動経験が1度しかなく、新採用として赴任した武生工業高校建築科では20年間勤務しました。そこでは、学生時代に「教育学」をほとんど学んでいない工学部卒業の私に、開校当初から勤務されている先輩方や様々な年齢の先生方から各立場やその時々に応じた適切なご指導やアドバイスをいただき、また、教務、生活指導、進路指導などの各部署や担任、学科主任など多くの仕事に携わらせていただき、教員として「育ててもらった」との思いが強くあります。現在勤務している敦賀工業高校では、2度目の学年主任兼務の担任として、工業高校としてはバランスの取れた年齢構成の教職員集団の一員として、悪戦苦闘の毎日を生徒とともに送っています。

今、福井県内の工業系の高校では、尊敬する経験豊富な先生方が毎年数人ずつ教壇を去られています。若い先生方が十分に補充されることはほとんどありません。学校を取り巻く今日的な諸問題が山積する現場の現状においては、要求される課題がさらに多くかつ複雑になっており、その解決のためにはどうしても教師集団の協働が必要であると思っています。また、現在そしてこれからの時代において工業高校を卒業してすぐに社会へと出ていく生徒達のことを考えると、工業高校時代にこそ学校における協働そして学校の枠を越えた地域社会における協働を知り、さらに協働によって「生きていく力」を学ぶことが大切ではないかとも思っています。

今まで工業高校で教員生活を続けてきたものの、高校をはじめとする県内外の多くの学校の現状をほとんど知らず、この先も赴任する学校が限られていることから、教職大学院では教育の学問的なバックグラウンドを得るとともに、いろいろな先生方から多くの学校の情報を直接お聞きすることで、学校における教師間の連携や協働体制をどのようにすればつくることができ、また、実践力を持つ教師集団のとして総合力を発揮することができるかを見つけ出せればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 木下 慶之 きのした よしゆき

本年度から本校のスクールリーダー養成コースに入学しました木下 慶之(きのした よしゆき)旧清水町(現福井市)出身の36歳です。福井大学教育地域科学部附属中学校に勤務しております。教科は理科です。よろしくお願いいたします。

平成13年3月に本校の大学院教育学研究科(理科教育・地学専攻)を卒業し、初任校の三方中学校、異動して母校の清水中学校へ、そして教育実習でお世話になった現任校へと、これまで中学校教員として12年間勤務して参りました。研究校である現任校に赴任したことで、改めて「教育とは」「学校とは」「学力とは」「理科とは」などについて、根本を問い直す機会が増えてきました。これまでを振り返りますと、教科指導だけでなく、生徒指導に部活指導、その他の校務分掌などを、ただ何とかやりこなすことで精一杯で、その日暮らしのような日々を過ごしてきた感が大いにあります。そこで、この入学をチャンスにして、これまでの自分の実践をじっくり振り返り、再度自分がこれから教師として何をしていきたいのか、限られた時間と条件の中で子ども達や学校、地域のために何をすべきか、何ができるのかを吟味し、今後の実践の方向性を研鑽していきたいと思っています。

さて、合同カンファレンスでもそうなのですが、現任校では「語り合う」という場が多く設定されています。現任校では月に1回教育実践研究会、そして7月と3月には実践報

告があり、教育実践レポートをもとに1人100分ほどの報告・意見交流をします。福井大学が企画する年2回のラウンドテーブルと同様、自分の実践を語り、聞いてくださる方から新たな視点をいただきます。赴任当初は、自分自身を表現する、あるいは自分の実践や想いを語るというのがとても億劫でした。話をするのがとても苦手であり、どちらかという聞き役に回る事が多いタイプです。かつて先輩には「特技は相槌だな」と茶化されたこともあり、現任校でも「そうっすね」という発言が未だ多いと同僚に指摘されます。

しかし、この3年間で次第に意識は変容してきた気がします。表現しないと深く考えないし、自分自身の本音と向き合うことができないことを実感することが多くなってきました。合同カンファレンスでは、早速いろいろな職場、専攻、教科の方々と語り合う機会をいただいています。問われることで、気づく自分の意識、必死になって応答することで自分が何をどこまで理解しているのかを実感することができます。4月当初の「3つの種」は自分の根本を探るための貴重な経験となりました。また、先日は偶然お二人の方から同じようなことを聞かれました。「附属中の先生って忙しいと聞きますが、どうしてみなさんそんなに頑張ることができるのですか?」という質問です。「なぜ頑張ることができるのか?」「何のために頑張っているのか?」無意識でしていることを意識する瞬間です。咄嗟に思いついたのは、「研究校に赴任してしまったという覚悟」もありますが、やはり「子ども達が頑張る姿を見ると、何とか応援したくなる」から「頑張る仲間、支えてくれる同僚」といって、一緒に頑張る

うという意欲が湧いてくる」から。というような答えが自分の中から出てきました。まだまだ意識できていないこと、表現できていないこともあるのですが、「研究する意欲」は、1人では限界があり、同僚や仲間、そして子ども達がいるからこそ湧くのだと思います。本校の研究主題は「探究するコミュニティ」です。これは子ども達だけに求めているもので

なく、我々教師自身もその難しさに悩みながらも、その意義について学ばせていただいているような気がします。教職大学院ではさらにいろいろな方々と語り合い、つながりを築きながら、学び得たことを現場での教育実践に繋げていき、また自身も何か少しでも貢献できるといういなと思いません。みなさま大変お世話になります。

## 敦賀友だち作りワイワイ講座に参加して

教職専門性開発コース2年 後藤 歩実

現在私は、中藤小学校の特別支援学級で課題別実習をしており、クラスは1年生から6年生の異年齢の児童で構成されています。1年間のインターンシップでは、子どもたちとのかかわりを通して、異年齢の(能力に差がある)子どもたちがかかわり、学ぶことの価値とそれをどのように授業の中で仕組んでいくかということを考え、実践してきました。

今回富永先生から異年齢の子ども達の“友だちづくり”のワークショップに誘っていただいたときは、教員採用試験の勉強の気分転換程度に捉え、軽い気持ちで参加しました。しかし、1回目の活動で、富永先生が、いきなり「友達ってどうやったらなれるのかな？」と幼稚園から中学1年生までいる子どもたちに向かって問いかけ、活動のところどころに子どもたちに「友達ってどういうもの？」「自分が楽しければいいのかな？」など疑問を投げかけながら活動がすすめられ、子どもたちも活動を楽しみながらも“一人で楽しむ”ことに疑問を感じたり、“自分たちは楽しいけど…”と幼稚園の子が泣いている様子を見て、モヤモヤ感を抱いたりしている姿を見ながら、これは、私が去年1年間で考え、大切にしてきたことに繋がっていることに気が付きました。



2回目の活動では、子ども達が富永先生の問いかけに、答えを出せないながらも考え、悩みながら、少しずつ全体としてもお互いに思いやる落ち着いた雰囲気がうまれてくることを感じられました。私がこのワークショップの中で、子どもたちが“友達を作れた！”と実感したなど感じたのは、最後の粘土遊びでした。小グループになって、最初一人ひとり好きなものを作り、その後、大きな模造紙がグループに1枚ずつ配られ、富永先生から『その上に全員の作品が登場する世界を自由に作ってください！』というお題が出され、子どもたちは、それぞれのグループで友達としゃべりながら、模造紙の上に自由な世界を作り上げていきました。

私が担当したグループの子どもたちは、子ども同士の会話からどんどんイメージを膨らませ、全員の作品が組み合わせられることでできる「レストラン」を作り上げていきました。その中でも、特に印象的だったのは、みんなで作る一つのものを作りながらも、大きな作品の中のところどころに、一人ひとりの“自分”を表現している姿が見られたことです。ただ、一人ひとりの作品を一つにまとめるだけでなく、他の子の作品と組み合わせ、そこで得た刺激でさらに“自分”を作品の中に表現していく。それが、うまい具合に作品全体のよさに繋がっていると感じました。

最後にそのレストランの看板を作ろうという話になった時、子どもたちから「“ともだちレストラン”がいいんじゃない？」というアイデアがでて、満場一致で決まりました。子どもたちが今回のワークショップを通して、つかんだすべてがその作品に現れ、とても素晴らしい作品になったと感じました。

異年齢の子どもたちがどのようにつながっていくのか、年長者が年少者を支える、助けることは、活動の中にももちろん見られたし大切なことだと思います。しかし、それ以上に年齢に関係なく、他の子のアイデアを「いいね！」と認められる関係を作ることが大切なのではないかと感じました。他の子のアイデアを自分でどんどん吸収して、そこに新たに自分の味も混ぜて、友達のものとはまたちょっと違ったものを表現する。そしてそれをまた認め合える。そんな関係性をこのワークショップを通して子どもたちは自然と身につけていったように感じました。





**福井大学** 大学院教育学研究科  
UNIVERSITY OF FUKUI 教職開発専攻 (教職大学院)

Department of Professional Development of Teachers,  
Graduate School Education, University of Fukui

**最終日**  
**17:00まで**

## 出願期間 平成25年9月3日(火)～6日(金)

【ガイダンス】 9月14日(土) 10:00-12:00 文京キャンパス総合研究棟V 6階

【選抜期日】 9月21日(土・祝)

9:00-10:30 専門科目A 学校改革実践研究の基礎

11:00-12:30 専門科目B 教育実践の分析

13:30- 口述試験

【合格者発表】 10月1日(火)

【入学手続き】 12月11日(月)～17日(火)

【入試についてのお問い合わせ】

〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学学務部入試課 TEL: 0776-27-9927

E-mail: g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp



### ★スタッフ紹介

7月に教育地域科学部支援室に配属されました、25年度新規採用職員の平岡まりなです。配属されてから1週間がたちました。学生時代に慣れ親しんだ場所ですが、業務に関してはすべてが新しいことばかりで、助けてくださる周りの方々に感謝でいっぱいの日々です。教職員・学生をはじめとした様々な方々と接していく中で、多くを学び、より良い仕事につなげていきたいと思っています。今はまだ、電話をとることも精一杯ですが、大学職員として、社会人として、しっかりと仕事ができるよう、少しでも早く業務を覚えていきます。どうぞ、よろしくお願いたします。

### Schedule

7/22mon - 7/24 wed 夏の集中講座 (1a)

7/25thu - 7/27 sat 夏の集中講座 (1b)

7/29mon - 7/31 wed 夏の集中講座 (2a)

8/1thu - 8/3 sat 夏の集中講座 (2b)

8/19mon - 8/21 wed 夏の集中講座 (3a)

8/22thu - 8/24 sat 夏の集中講座 (3b)

9/21 sat 大学院入試

#### 【編集後記】

6月に開催された実践研究福井ラウンドテーブル、今回は県内外から470名をこえる方々にご参加いただき、有意義な実践の交流・共有の場を持つことができました。どうもありがとうございました。今号では、その様子をふりかえりながら参加された方々からの声を掲載いたしました。編集しながら早くも次のラウンドに向けた準備が楽しみになってきました。福井大学教職大学院では、いよいよ夏の集中講座が始まります。院生・スタッフの皆さんとともに、自分自身もこの間の経験をふりかえって辿り直し、それをふまえて今後の課題と展望をじっくり深める夏にしたいと意気込んでおります。(杉山)

### 教職大学院Newsletter No.55

2013.07.29発行

2013.07.29印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdfukui@yahoo.co.jp